

古代インドの病因論 — 運命と人為 —

安東 弘子・針貝 邦生

An Aetiological Agency Theory in India — Fate and Human Effort —

Hiroko ANDO & Kunio HARIKAI

The third section entitled “Diagnosis on the destruction of the inhabited country (Janapadoddhamsanīyavimāna)” of Chapter 3 (Vimānasthāna) in the *Carakasamhitā* deals with the subject of life span. The book, compiled circa the second century A.D. when King Kanishka was in reign, is one of the most popular treatises of medicine in India. The section also contains a doctrine on the *Karma* theory which is peculiar to *Carakasamhitā*. In this paper a Japanese translation of this section and commentaries thereon by Cakrapāṇidatta (circa the eleventh century) follow the authors' short introductory essay.

序

インドの医書『チャラカサンヒター(*Carakasamhitā*=abbr.CS)』第3巻(Vimānasthāna)第3章は、寿命に関する見解がみられることで注目される章である^(注1)。

インドの医学アーユルヴェーダを説くアートレーヤに、弟子のアグニヴェーシャが、あらゆるものの寿命とはあらかじめ定められているのかどうかを尋ねる。この問いに関連して展開される話題は、CSが基づく医学大系の生命観を示している。

この質問への返答は、一般的には、決定論的立場からは定められているというものになり、人間の努力を認める立場からは定められていないというものになるであろうと考えられる。このような問題は、インドでは必然的に、輪廻やカルマ^(注2)の理論と関わりを持つ。一般に、輪廻の概念のなかで、カルマは決定要因としての働きを担っている。CSには、この種のカルマ^(注3)に、運命(daiva)と人為(puruṣakāraもしくはpauruṣa)という分類が設けられている。daivaとは「神」を意味するdevaからの派生語であり、puruṣakāraとは「人間」を意味するpuruṣaと「為す・作る」などを意味する√krとに由来する語である。この区分に割り当てられた意味やカルマの機能・特徴の配分、その差異と共通項などを明らかにすることは、この医学大系におけるカルマの理論の趣意を理解し、CSの生命観を知るための手だてとなるであろう。ここでは翻訳を試みるにとどまった分析・研究は、筆者の今後の課題としたい。

ここで、構成に従って内容を簡略に紹介すれば -----

CS.3.3は、パンチャーラを中心都市カーンピリヤでアートレーヤが語ったことを、主に散文で叙述している。アートレーヤの話にアグニヴェーシャが質問し、それに応えてまたアートレーヤが話すという形式で論は進められ、章の主題は、地域一帯に作用して地域的な惨事をまねくもの、にある。

環境に関して論ずる冒頭（第4節）から、一貫してすでに、自然を構成する一部として人間を捉える視点がうかがわれる。環境についてのより詳しい論説（第6-7節）を導くアグニヴェーシャの質問（第5節）は、流行病という現象に説明を求めるものであるとともに、一方では、診療の際に人それぞれの多様性を重視するCSの基本的立場を反映するものでもある。

さて、悪影響を及ぼす環境に対して有効とされる「薬」の列举（第8-18節、とくに第13-17節）では、生理的なことがらと倫理的・宗教的なことがらとが混在している。また、環境の悪化の原因は、人々のアダルマに帰されている（第19-23節）。これら二つのことは、自然現象を司る神的存在・勢力に、人間の倫理的・宗教的行いが影響を持つという考え方に通じているのであろう。

続いて、アダルマにかかわる詳しい説明として、医学の観点をまじえた時代的な世界観（ユガの減退）がやや詳しく語られた（第24-27節）後に、アグニヴェーシャの寿命に関する質問が現れる（第28節）。返答として、まずカルマに関わる論説が、韻文で語られる（第29-35節）。続く第36節では、寿命が完全に定められているという極端な見解の不自然さを指摘し、また日常的に経験される例をひいて人為の影響の重要性を示し、適切な医療の要点を述べている。次に、天逝・寿命を全うするという表現が意味するところを問われた（第37節）アートレーヤは、車軸をたとえに用いて、天逝と寿命を全うすることとを説明している（第38節）。ここにも、自然界の秩序のなかに人間存在を見る根本的な姿勢がよく表れている。そして、この説明において、人為によっても死が導かれることが強調され、そのうえで、天逝をもたらす「誤った治療」という表現が現れる。このため、次に適切な医療についてアグニヴェーシャが尋ねるところ（第39節）から、話題が治療法へとうつっていくことになる。

第40節以降では、原因とは逆の性質を有するものを処方することによって属性を補う治療（＝CSが基礎とする治療原理）が説明される。最後に、施療すべきでない人々について述べられ（第45-46節）、最末尾は、章末の韻文での要約・奥付で結びとなる。

テキストは *The Carakasamhitā of Agniveśa, revised by Caraka and Dṛdhabala with the Āyurveda-Dīpikā Commentary of Cakrapāṇidatta*, edited by Vaidya Jāḍavaji Trikaṁji Āchārya, 4th edition, New Delhi 1981. を使用した。また現代語訳として (1) *Agniveśa's Caraka Samhitā*, Text with English Translation & Critical Exposition Basad on Cakrapāṇi Datta's Āyurveda Dīpikā, by R.K.Sharma and V.B.Dash, vol.I&II, Chowkamba Sanskrit Studies vol.XCIV, Varanasi 1977-1983. (=abbr.S-D) (2) *Caraka Samhitā*, Text with English Translation, by P.V.Sharma, vol.I-III, Chaukhambha Orientalia, Varanasi-Delhi 1981-1992. (=abbr.S) (3) *Caraka Samhitā*, Translated by A.C.Kaviratna and P.Sharma, vol.I&II, 2nd revised edition, Delhi 1996. (=abbr.K-S) を参照した。

CS.3.3

CS.3.3.1 athāto janapada-uddhvaṁsanīyaṁ vimānam vyākhyāsyāmaḥ //1//

さてこれから、居住地域の破滅^(注4)の判断法を説明しよう。

CS.3.3.2 iti ha smāha bhagavān ātreyaḥ //2//

と、尊いアートレーヤは言った。

CSC.3.3.1-2 dvividho hetur vyādhi-janakah prāṇinām bhavati --- sādharāṇaḥ, asādharāṇaś ca; tatrāsādharāṇaṁ pratipuruṣa-niyataṁ vāta-ādi-janakam āhāra-ādy abhidhāya bahujana-sādharāṇaṁ vāta-jala-deśa-kāla-rūpaṁ sādharāṇa-roga-kāraṇam abhidhātuṁ janapada-uddhvaṁsanīyo 'bhidhīyate //1//2//

CSCI.3.3.1-2 生き物に病気を生じさせる原因は二種ある。一般に共通のものと、特殊なものとである。そのうち特殊なもの、すなわち人ごとに決まった(限定された)ヴァータ等^(注5)を生み出す食物等を説明した後で[ここからは]、多くの人々に共通の風・水・場所・時という共通の病気の原因を説明するために、居住地域の破滅が説明される。//1//2//

CS.3.3.3 janapada-maṇḍale pañcāla-kṣetre dvijāti-vara-adhyuṣṭe kāmpilya-rāja-dhānyām bhagavān punarvasur ātreya 'ntevāsi-gaṇa-parivṛtaḥ pāścime gharmamāse gaṅgāfire vana-vicāram anuvicaraṇ śiṣyam agniveśam abravīt //3//

民衆が居住する範囲でパンチャラの地、最も優れたドヴィジャーティたちが住む首都カーンピリヤにおいて尊いプナルヴァス=アートレーヤは弟子たちにかこまれて、夏季の終わりにガンジス川の岸近くの森を絶えず歩きまわりつつ、歩きながら弟子のアグニヴェーシャに言った。

CSC.3.3.3. janapada-vasati-upalakṣitaṁ maṇḍalaṁ janapada-maṇḍalaṁ, "pañcāla-kṣetre" iti tasya viśeṣaṇam / dvijāti-vara-adhyuṣṭa iti vacanena mahājana-sevite 'pi deśe 'dharma-vaśād janapada-uddhvaṁso vakṣyamaṇo bhavatīti darśayati/ pāścime gharmamāsa iti jyesthe/ vana-vicāram anuvicarann iti vanaṁ vicarya vicaryānuvucarann iti arthaḥ //3//

CSCI.3.3.3.3 民衆が住んでいるということによって限定されている範囲が、「民衆が居住する範囲」である。「パンチャラの地」とは、その限定である。「最も優れたドヴィジャーティたちが住む」ということによって、優れた人々が住んでいる場所であっても、アダルマな力から居住地域の破滅が現に今語られることを説明している。「夏季の終わりに」とは、ジャイシュタ(5月半ば～6月半ば)にということである。vanavicāram anuvicaran とは、森を絶えず歩きまわりつつ歩きながらという意味である。//3//

CS.3.3.4 drśyante hi khalu saumya! nakṣatra-grahaṇa-candra-sūrya-anila-analānām diśām cāprakṛti-bhūtānām ṛtu-vaikārikā bhāvāḥ, acirād ito bhūr api ca na yathāvad rasa-vīrya-vipāka-prabhāvam oṣadhīmāṁ pratividhāsyati, tad-viyogāc cātāṅka-prāyatā niyatā / tasmāt prāg uddhvaṁsāt prāk ca bhūmer virasī-bhāvād uddharadhvaṁ saumya! bhaiṣajyāni yāvan nopahata-rasa-vīrya-vipāka-prabhāvaṇi

bhavanti / vayam caisām rasa-vīrya-vipāka-prabhāvān upayoksyāmahe ye cāsmān anukāṅkṣanti, yāṁś ca vayam anukāṅkṣāmaḥ / na hi samyag uddhṛteṣu saumya! bhaisajyeṣu samyag vihteṣu samyak cāvacāriteṣu janapada-uddhvaṁsa-karāṇām vikāraṇām kiṁcit pratīkāra-gauravaṁ bhavati //4//

良き人（アグニヴェーシャ）よ！実に今、星宿・惑星^(注6)・月・太陽・風・火・方位の非本来的な要素に、季節の変化の存在が見られる。このことから、すぐに地もまた薬草のラサ・ヴィールヤ・ヴィパーカ・プラバーヴァ^(注7)を正しく作らなくなるだろう。そしてその分離から、病気の蔓延は必然である。それ故〔病気による居住地域の〕破滅の前に、また地がラサをなくす前に、良き人よ！薬を採っておきなさい。〔薬の〕ラサ・ヴィールヤ・ヴィパーカ・プラバーヴァが害されたものとならないうちに。そして我々はこれらのラサ・ヴィールヤ・ヴィパーカ・プラバーヴァを、我々〔の治療〕^(注8)を望む者たちと我々が望む者たちとに用いよう。良き人よ！実に、薬が正しく採られ、正しく作られ、正しく投与されたならば、居住地域の破滅をもたらす病気の治療^(注9)の困難は全くない。

CSC.3.3.4 ṛtu-vikāraya bhūtā ṛtu-vaikārikāḥ, ṛtuvikāraś copalakṣaṇam, tena jala-deśa-vāta-vikāraya bhūtā iti mantavyam; yato bhūmi-ādīnām api vikṛtiṁ vakṣyati / kiṁvā ṛtu-ananurūpā ṛtu-vaikārikāḥ; tena, ṛtu-ananurūpa-lakṣaṇam eva nakṣatra-ādīnām vikṛtiṁ ity uktam bhavati; grīṣme hi nakṣatrāṇi nirmalāni bhavanti, tāni yadi tuṣāra-channāni grīṣme bhavanti, tadā vikṛtāni bhavanti boddhavyam / bhūr api cety api vacanād jala-anilau ca grāhayati; tena, bhūs tāvad oṣadhīnām pradhānam kāraṇam, sā rasa-ādīn na pratividhāsyati; jala-vātāv api cauṣadhīnām rasa-ādīn na pratividhāsyata ity uktam bhavati / pratividhāsyatī janayiṣyati / uddharadhvam iti bahuvacanam bahu-antevāsin-yukta-agniveśa-abhiprāyeṇa; agniveśas tu pradhānatvenaika eveti "agniveśa" iti padena

tathā "saumya" iti padena sambodhyate; bheṣaja-uddharaṇam tu bahubhir eva kartavyam ity abhiprāyeṇa bahuvacanam / bhavati hi pradhānam sambodhya gaṇa-sampādyakriyāyām bahuvacanam; yathā --- senā-pate yudhyadhvam iti / anye tu saumya-padam bheṣaja-viśeṣaṇam kurvanti / ye cāsmān anukāṅkṣanti ye cāsmān bhiṣajo 'nukāṅkṣantīty arthah, yāṁś ca vayam anukāṅkṣāmaś cikit-syatvena / etena, ye vaidyam anukāṅkṣanti te vaidya-priyatvena sādhyāḥ, asādhyā hi vaidya-dviṣa uktāḥ; vaidyāś ca yān icchanti te sādhyarogā eva, asādhyān hi vidyā necchanti / etenānyeṣām api yeṣām bheṣaja-sādhyā rogās te āsām oṣadhīnām rasa-ādīn upayoksyantīty arthah / yadi ca ye asmat-gatāḥ, yāṁś ca vayam prayojanavaśāt anugataḥ, te upayoksyantīty vyākhyāyate tadā ātreyaśya pakṣa-rāgitvenāptatvam na sambhavati, "sarva-prajānām pītrvad śaranyah" (ci.a.5) ity vacanāc cāśya nīrāgatvam uktam //4//

CSCI.3.3.4 季節が変わるための要素が「季節の変化」であり、また季節が変わることは「次のようなことを」示唆するものである。それによって、水・地・風が変化するための諸々の要素があると考えられるべきである。なぜなら、地等の変化をも後に〔第20節において〕述べるから。あるいはまた、季節との不適応が「季節の変化」である。従って星宿等の変化は季節との不適応を示すものに他ならないと言われたのである。実に、夏には星宿ははっきりとしている。もしそれらが夏にかすみに覆われているのであれば、変化していると見なされるべきである。「地もまた(bhūr api ca)」という「も(api)」というこの語によって、水と風も含意している。それによって、まず地は薬草にとっての主要原因であり、それ（地）がラサ等を作らないだろうし、水と風もまた薬草のラサ等を作らないだろうということが言われているのである。「作るだろう(pratividhāsyati)」とは、生み出すだろう(janayiṣyati)ということである。「採ってお

きなさい(uddharadhvam)」という複数形は、多くの弟子たちと結びついたアグニヴェーシャを意味していることによる。一方、主要な人物であるアグニヴェーシャが一人のみであることは、「アグニヴェーシャ(単数)よ」という語によって、つまり「良き人(単数)よ」という語によって知られる。しかし薬を採ることは、まさに大勢で為されるべきであると意味するが故に複数形である。なぜなら、主要な者を教えた後は集団によって成されるべき行為に関しては、複数形があるから。将軍よ戦え(senāpate yudhyadhvam)というのと丁度同じである。一方別の者たちは、saumyaという語を薬の限定と為している。「我々を望む者たち」とは我々の治療を望む者たちという意味であり、「我々が望む者たち」とは治療されるべきことから「望まれる者たちである」。これによって「次のようなことが言われている」。医者を目指す者たちは医者に好まれること故に、治療する者たちである。実に治療しない者たちは、医者に嫌われる者たちと言われる。また医者たちが求めるのは、治療する病気に他ならない。実際、治療しないものを医者たちは求めない。このことによって「以下に述べる解釈とは」別の者たちであっても、病気が薬で治療する者たちには彼らは、これらの薬草のラサ等を用いるだろうという意味である。もし、「我々を望む者たちと我々が望む者たちとに」という本文中のこの部分を「我々に属している者たちと目的故に我々が従う者たちとに」と解釈して、そのような者たちに薬草のラサ等を「彼らが用いるだろうと説明されるならば、アートレーヤには主張に執着することから信用性があり得ない。「全ての生き物にとって、父のように助けを与える者である」と[CS.9.5.3において]言われているから、この者(アートレーヤ)が執着を離れていることも言

われている。//4//

CS.3.3.5 evaṃ vādinam bhagavantam ātreyaṃ agniveśa uvāca --- uddhṛtāni khalu bhagavan! bhaiṣajyāni, samyag vihitāni, samyag avacāritāni ca; api tu khalu janapada-uddhvaṃsanam ekenaiva vyādhinā yugapad asamāna-prakṛti-āhāra-deha-bala-sāmya-sattva-vayasāṃ m anuṣyāṇaṃ kasmād bhavatīti //5//

このように言う尊いアートレーヤにアグニヴェーシャは言った。尊い人よ！いま薬が採られ、正しく作られ正しく投与されていても、一方で今、異なる体質・食物・身体・体力・習慣・精神状態・年齢を持つ人々が、同時に同じ一つの病気「にかかること」によって居住地域の破滅があるが、何故か。

CSC.3.3.5 uddhṛtānīti vacanam abhūte bhūtavaceti prayogāt boddhavyam, yathā --- acirakartavye kṛtam iti vadanti; na hi vacana-kāla eva oṣadhīnam uddharanam sambhavatīti/ ekeneti eka-jātyena/ asamāna-prakṛti-ādinām samāna-kāraṇa-abhāvān na tulya-rūpo vyādhir bhavitum arhatīti prāśna-arthaḥ //5//

CSCI.3.3.5 「採られ(uddhṛtāni)」という語は、「現にないものについてあるかのように」という「過去分詞の」使用法に基づいて知られるべきである。例えば、すぐ後に為されるべきことについて為されたこと(kṛtam)と言う。実に、まさに言葉を発している時には薬草を採ることはない、ということである。「同じ一つの」とは、一種類のということである。異なる体質等を持つ者たちには同じ理由が存在しないから、同じ病気はあり得ないという質問の意味である。//5//

CS.3.3.6 tam uvāca bhagavān ātreyaḥ --- evam asāmānyavatām apy ebhir agniveśa! prakṛti-ādibhir bhāvair manuṣyāṇām ye 'nye bhāvāḥ sāmānyās tad-vaigūṇyāt samāna-kālāḥ samāna-līṅgās ca vyādhayo 'bhinirvartamānā janapadam

uddhvaṃsayanti / te tu khalv ime bhāvāḥ
sāmānyā janapadeṣu bhavanti; tad yathā ---
vāyuh, udakaṃ, deśaḥ, kāla iti //6//

尊いアートレーヤは彼に言った。アグニヴェー
シャよ！そのように、これら体質等に共通性が
ない人々であっても、他の諸々のものが共通し
ている。それらの欠陥故に、同じ時期と同じ特
徴とをもつ諸々の病気が蔓延しつつ居住地域を
破滅させる。一方これらの共通のものは、居住
地域の内に存在している。すなわち、風・水・
場所・時である。

CSC.3.3.6 samāna-līṅgā iti tulya-līṅgāḥ //6//

CSCI.3.3.6「同じ特徴をもつ」とは、特徴を等し
くするもの（病気）のことである。//6//

CS.3.3.7 tatra vātam evaṃvidham anārogya-
karaṃ vidyāt; tad yathā --- yathartu-viśamam
atistimitam aticalam atiparuṣam atīṣitam aty-
uṣṇam atirūṣam atyabhiṣyandinam atibhairava-
ārāvam atipratihata-paraspara-gatim atikuṇḍali-
nam asāmnya-gandha-bāṣpa-sikatā-pāṃsu-dhū-
ma-upahatam iti(1); udakaṃ tu khalv atyārtha-
vikṛta-gandha-varṇa-rasa-sparśam kledabahu-
lam apakrānta-jalacaravihaṅgam upakṣiṇa-
jaleśayam aprāṇikaram apagata-guṇam vidyāt(2);
deśam punaḥ prakṛti-vikṛta-varṇa-gandha-rasa-
sparśam kleda-bahulam upasṛṣṭam sarīṣpa-
vyāla-maśaka-śalabha-makṣikā-mūśaka-ulūka-
śmā-śānikaśakuni-jam-būka-ādibhis tṛṇa-ulūpa-
upavana-vantaṃ pra-tāna-ādi-bahulam apūrva-
vat-avapatita-śuṣ-ka-naṣṭa-śasyam dhūmra-pav-
anam pradhmāta-patatri-gaṇam utkrūṣṭa-śva-
gaṇam udbhrānta-vyathita-vividha-mṛga-pakṣi-
saṅgham utsṛṣṭa-naṣṭa-dharma-satya-lajjā-ācā-
ra-śīla-guṇa-jana-padam śaś-vat-kṣubhita-udī-
rma-salilāśayam pratata-ulkā-pāta-nirghāta-
bhūmikampam atibha-ya-ārāva-rūpaṃ rūkṣa-
tāmra-arūpa-sita-abhra-jāla-saṃvṛta-arka-cand-
ra-tārakam abhikṣṇam sa-saṃbhrama-udvegam
iva satrāsa-ruditam iva satamaskam iva guhyaka-
ācaritam iva ākrandita-śabda-bahulam ca abhitam
vidyāt(3); kālam tu khalu yathartu-līṅgād vi-
parīta-līṅgam atilīṅgam hīna-līṅgam cāhitam

vyavasyet(4); imān evaṃ-doṣa-yuktāṃś caturō
bhāvān janapada-uddhvaṃsa-karān vadanti ku-
śalāḥ; ato 'nyathābhūtāṃs tu hitān ācakṣate //7//

そのうち次のような種類の風を、病気をもた
らすものと知るべきである。すなわち、季節外
れのもの、過剰に湿気のあるもの、過剰に動き回
るもの、過剰に激しいもの、過剰に冷たいもの、
過剰に熱いもの、過剰に乾燥したもの、過剰に流
れ出すもの、過剰に恐ろしい音のするもの、過剰
に互いにぶつかり合うもの、過剰に円を描くも
の、不適當な香・蒸気・砂礫・砂塵・煙に汚染
されたものである(1)。さて一方「水に関しては」、
過度に変化した香・色・味・感触を持つ、
ひどく腐敗した、水鳥がいない、魚が減少してい
る水を、有害で属性を失ったものと知るべきで
ある(2)。さらに「場所に関しては」、本来的な
性質から変化した色・香・味・感触を持つ、ひ
どく腐敗した、爬虫類・蛇・蚊・イナゴ・蠅・
ラット・梟・死体置き場に集まる鳥・ジャッカル
等に悩まされる、イネ科の植物とウルーパの
茂みがある、蔓草などが多い、新奇な・落ちた・
乾いた・実を結ばない作物がある、煙たい風が
ある、鳥の群れが鳴き叫ぶ、犬の群れが吠える、
種々の鳥獣の群れが興奮して彷徨っている、居
住者にダルマ・真実・羞恥心・良俗・実践・長
所が見捨てられたり破壊されている、常に揺れ
動いて溢れ出る湖がある、しばしば流星・落雷・
地震がある、過剰に恐ろしい音と形状を持つ、太
陽と月と星とが乾いた・銅のような・赤い・白
い雲の網で包まれている、常に混乱と動揺に満
ちているような、不安と悲嘆に満ちているよう
な、暗さで満ちているような、グヒヤカ^(注10)
に歩き回られているように泣き声であふれた場
所を不適當であると知るべきである(3)。さて一
方「時に関しては」、季節の特徴とは逆の特徴
を持つ、過剰に「季節の」特徴を持つ、過少に
「季節の」特徴を持つ時を不適當と見なすべき

である(4)。これらのこのような欠点と結びついた4つの存在を、居住地域の破滅の原因と賢者たちは言う。このことから、諸々の他の存在は適当であると言われる。

CS.3.3.8 viguṇeṣv api khalv eteṣu janapada-uddhvaṃsa-kareṣu bhāveṣu bheṣajenopapādyamānānām abhayaṃ bhavati rogebhya iti //8//

さて、これら居住地域の破滅の原因という欠陥が存在しても、薬によって治療されている者たちにとっては、諸病に対する恐れはない、と[アートレーヤは言った]。

CSC.3.3.7-8 yathartu-viṣamam iti ṛtu-ananurūpam/ apagata-guṇam iti jīvana-pipāsā-harata-ādi-ukta-jala-guṇa-rahitam / prakṛti-varṇāder vikṛtā varṇa-ādayo yasya deśasya taṃ prakṛti-vikṛta-varṇa-gandha-rasa-sparśam / śnāśānikaśakuniḥ grdhraḥ / apūrvavad iti paricitam apy upahataatvena apūrvam iva dṛśyate/ utsṛjās ca naṣṭās ca dharma-satya-lajjā-guṇā janair yatra sa tathā; tatra ye dharma-ādi-uktās te utsṛjanti dharma-ādīni, ye tu dharma-ādīni sarvathā ajñānān nācaranti tān prati naṣṭāny eva dharma-ādīni / guhyaka-ākṛānto hi deśo yathā ākrandana-śabda-bahulo bhavati tādrśam //7//8//

CSCI.3.3.7-8 「季節外れの」とは、季節に不適応なことである。「属性を失った」とは、生き物の渴きを取り去ることなど以前に述べられた水の属性を欠いているということである。本来的な性質の色等が変化した色等を持つ場所が、「本来的な性質から変化した色・香・味・感触を持つ[場所]」である。「死体置き場に集まる鳥」とは禿鷲である。「新奇な」とは、よく知られていても汚染されていることによって、全く新しいもののように見えるということである。人々によってダルマ・真実・羞恥心・長所が見捨てられたり破壊されている場所、それがそのように言われている。そのうち、述べられたダルマ等を持つ者たちは、ダルマ等を見

捨てている。一方ある者たちは、ダルマ等を無知から全く行わない。そのような者たちに対して、ダルマ等はまさに「破壊されている」とある。実にグヒヤカに侵略された場所は、ちょうど泣き声であふれた[場所の]ようである。

//7//8//

CS.3.3.9 bhavanti cātra ---
vaigunyam upapannānām deśa-kāla-anila-ambhasām / garīyastvaṃ viśeṣeṇa hetumat sampravakṣyate //9//

またここに[詩節が]ある。欠陥を持つに至った場所・時・風・水が重要であることが、理由をもって特に取りあげて説明されるだろう。

CS.3.3.10 vātād jalam jalād deśam deśāt kalam svabhāvataḥ / vidyād duṣparihāryatvād garīyastaram arthavit //10//

風より水を、水より場所を、場所より時を、本来的に避け難いが故により重要であると賢者は知るべきである。

CS.3.3.11 vāyu-ādiṣu yathā-uktānām doṣānām tu viśeṣavit / pratikāryasya saukarye vidyād lāghava-lakṣaṇam //11//

しかし賢者よ、風等に関して述べられた諸々の欠点の阻止が可能であることについて、容易という特徴を知るべきである。

CSC.3.3.9-11 vaigunyam ityādinā duṣṭānām vāta-ādinām yasya ya utkarṣo yena ca hetunā tad āha / svabhāvato duṣparihāryatvād iti svabhāvād eva vāta-apekṣayā jalam duṣpariharam bhavati, jalāc ca deśaḥ, deśāc ca kālaḥ / vāto hi nivāta-deśa-sevayā duṣṭaḥ parihriyate, na tathā jalam, tad hi deha-vṛtti-artham avāśyam sevyam; jalam api ca yadi mahatā prayatnena tyajyate, deśas tu jala-apekṣayā duṣpariharo bhavati, tadvyatirekeṇāvasthātum aśakyatvāt; deśo 'pi yadi deśa-antara-gamanena tyajyate, kālas tu sarvathā tyaktum aśakya iti sarveṣv eva garīyān / "garīyaḥ param" iti pāṭhe yad yataḥ

param, tat tato gariyo vidyād iti yojanā/ etad-
viparyayaṇa lāghavam āha --- vāyu-ādīṣv ityādi/
pratīkāśasya saukarya iti yathā-ukta-vidhayā
vāta-ādi-parityāgasya sukaratvenety arthaḥ //9-
11//

CSCI.3.3.9-11 「欠陥を(vaiguṇyam)…」によっ
て、損なわれた風等に理由によって優越がある
ことを言う。「本来的に避け難いか故に」とは、
まさに本来的に風に比べて水は避け難いもので
あり、また水に比べて場所が、場所に比べて時が
「避け難い」ということである。なぜなら、損
なわれた風は風のない場所に身を置くことによ
って避けられるから。水は同様ではない。実にそ
れは、身体の維持を目的として必ず必要とされ
るものである。しかし水であっても、大きな努
力によって放棄される。一方場所は、水に比べ
て避け難いものである。それなしに存在するこ
とができないから。場所であっても、別の場所
へ行くことによって放棄される。しかし、時は
放棄することが全くできないため、まさに全て
の中でより重要である。「gariyaḥ param」とい
う読みを持つ別のテキストにおいては、後にあ
るものの方がより重要であると知るべしという
構造上の理解がある。この逆によって容易さを
説明して「風等に関して(vāyvadiṣu)…」とある。

「阻止が可能であることについて」とは、前に
述べたような仕方によって、風等を放棄するこ
とが可能であるからという意味である。//9-11//

CS.3.3.12 caturṣv api tu duṣṭeṣu kāla-anteṣu
yadā narāḥ / bheṣajenopapādyante na bhavanty
ātūrās tadā //12//

時を最後の「項目とする」4つのもの（風・
水・場所・時）が損なわれていても、人々が薬
によって治療されるならば、病気になることは
ない。

CS.3.3.13 yeṣāṃ na mṛtyu-sāmānyam sāmā-
nyam na ca karmaṇām / karma pañcavidham

teṣāṃ bheṣajam param ucyate //13//

死が共通しない者たちにとって、また諸々の
カルマが共通しない者たちにとって、パンチャ
カルマ^(注11)は最高の薬と言われる。

CS.3.3.14 rasāyanānām vidhivac copayogaḥ
praśasyate / śasyate deha-vṛttiś ca bheṣajaiḥ
pūrvam uddhṛtaiḥ //14//

また、諸々のラサーヤナ^(注12)の規定どおり
の適用が推奨される。〔害される〕^(注13)前
に採られた諸々の薬による身体の維持も推奨さ
れる。

CS.3.3.15 satyam bhūte dayā dānam balayo
devatā-arcanam / sadvṛttasyānuvṛttiś ca praśamo
guptir ātmanah //15//

真実、生物に対する哀れみ、贈物、諸々の供物、
神への崇敬、善行に従うこと、落ち着き、自己の
保護^(注14)。

CS.3.3.16 hitam janapadānām ca śivānām
upasevanam / sevanam brahmacaryasya tathaiva
brahmacāriṇām //16//

健全な居住地域に住むこと、禁欲の実践、禁欲
者に仕えること。

CS.3.3.17 saṃkathā dharmaśāstrānām maha-
rṣiṇām jita-ātmanām / dhārmikair sātṭvikair
nityam sahāsyā vṛddha-saṃmatāiḥ //17//

諸々のダルマシャーストラ・偉大なリシたち・
自己を制御した者たちについての話、ダルマに
忠実な者たち・善性をそなえた者たち・長老と
見なされる者たちと常に同席すること。

CS.3.3.18 ity etad bheṣajam proktam āyusaḥ
paripālanam / yeṣāṃ aniyato mṛtyus tasmin kāle
sudārune //18//

以上これらが、死の定められていない者が過
酷な時期にあるときに、命を守るといわれる薬
である。

CSC.3.3.12-18 yeṣāṃ na mṛtyu-sāmānyam iti na mṛtyu-janaka-daiva-sāmyaṃ yeṣāṃ astīty arthah / sāmānyam na ca karmaṇām iti na ca māraka-karma-sāmānyam yeṣāṃ astīty arthah / kecid hi sambhūyaiva janman-antare grāma-dāha-ādi-karma kurvate sma, tat-karma-balā samhata-mṛtyava eva bhavanti; kimvā pṛthag api mārakaṃ karma kṛtam keśāñcid ekakālam vipacyamānaṃ bhavati, te 'pi sama-kāla-mṛtyavo bhavanti/ tatra, na mṛtyu-sāmānyam ity anenotpanna-riṣṭatvād eva kecid asādhyā iti darśayati, na karma-sāmānyam ity anena kecic cāṇḍa-riṣṭā api niyata-māraka-karma-vaśād asādhyā bhavanti darśayati; kimvā na mṛtyu-sāmānyam ity anena ca mārako vyādhiḥ sādharmaṇa ucyate, na karma-sāmānyam ity anena ca māraka-vyādhi-janakaṃ karmocyate/ pūrvam uddhṛtair iti vyāpatteḥ pūrvam gr̥hītaiḥ/ guptiḥ mantra-ādinā rakṣā/ aniyata iti vacanena durbala-karma-ārabdho hi mṛtyuḥ pāryata evaivaṃ pratikartum iti darśayati //12-18//

CSCI.3.3.12-18 「死が共通しない者たち」とは、死を生み出す運命(daiva)が等しくない者たちという意味である。「また、諸々のカルマが共通しない者たち」とは、また、死に至らしめるカルマが共通しない者たちという意味である。実に、以前の生存において共同して村を燃やすなどのカルマを為した者たちは、そのカルマの力から、まさに一つにまとめられた死を持つ者たちとなる。あるいは、死に至らしめるカルマが別々に為されていても、同時に成熟しつつあることがある。彼らもまた、同時の死を持つ者たちとなる。そこで、「死が共通しない」ということによって、ある者たちが治癒しないのは悪い前兆が生じているからに他ならないということを説明している。「カルマが共通しない」ということによって、またある者たちは、悪い前兆が生じていなくても、必ず死に至らしめるカルマの力故に治癒しないということを説明している。あるいはまた、「死が共通しない」ということによって、死に至らしめる共通の病気

が言われ、そしてまた「カルマが共通しない」ということによって、死に至らしめる病気を生み出すカルマが言われている。「前に採られた」とは、損なわれる前に得られたということである。「保護」とは、マントラ等による守護のことである。「定められていない」ということによって、力の弱いカルマが引き起こす死は、まさにこのように治療され得るということを説明している。//12-18//

CS.3.3.19 iti śrutvā janapada-uddhvaṃsane kāraṇāni punar api bhagavantam āreyaṃ agniveśa uvāca --- atha khalu bhagavan! kutomūlam eṣāṃ vāyu-ādīnāṃ vaiguṇyam utparyate? yenopapannā janapadam uddhvaṃsantīti //19//

以上、居住地域の破滅に関する諸々の原因を聞いた後に、さらにまた尊いアートレーヤにアグニヴェーシャは言った。さて、尊い人よ！それ（欠陥）を持つに至ったものが居住地域を破滅させるような、これらの風等の欠陥はどのような原因をもって現れてくるのか、と。

CS.3.3.20 tam uvāca bhagavān āreyaḥ --- sarveṣāṃ apy agniveśa! vāyu-ādīnāṃ yad vaiguṇyam utpadyate tasya mūlam adharmah, tat-mūlam vāsat-karma pūrva-kṛtam; tayor yonih prajāparādha eva / tad yathā yadā vai deśa-nagara-nigama-janapada-pradhānā dharmam utkramyādharmaṇa prajāṃ vartayanti, tadāśrita-upāśritāḥ paura-janapadā vyavahāra-upajīvinaś ca tam adharmam abhivardhayanti, tataḥ so 'dharmah prasabham dharmam antardhatte, tatas te 'ntarhita-dharmāṇo devatābhir api tyajyante; teṣāṃ tathāntarhita-dharmaṇām adharma-pradhānāṃ apakrānta-devatānām ṛtavo vyāpadyante; tena nāpo yathākālam devo varṣati na vā varṣati vikṛtam vā varṣati, vātā na samyak-abhivānti, kṣitir vyāpadyate, salilāny upaśuśyanti, oṣadhayaḥ svabhāvaṃ parihāyāpadyante vikṛtīm; tata uddhvaṃsante janapadāḥ spr̥śya-abhyavahārya-doṣāt //20//

尊いアートレーヤは彼に言った。アグニ

ヴェーシャよ！風等のすべてに欠陥が現れる。その原因はアダルマである。または、以前に為されたよくないカルマ(asatkarma)がその原因である。それら両方の源は、知の欠如(prajñāpānātha)に他ならない。例えば、地方・町・市場・居住地域の主要な者たちがダルマを離れて人々にアダルマな生活をさせるならば、依拠する者たちと彼らに依拠する者たち・都市と地方の住民たち・商売で生計を立てる者たちが、そのアダルマを増大させる。それ故そのアダルマが、むりやりダルマを覆い隠す。そして、ダルマを覆い隠された者たちは、神々にも棄てられる。また、彼らのダルマが覆い隠され、アダルマが主となり、神々がなくなった時に、諸々の季節が損なわれる。従って、適切な時に神が雨を降らさない。あるいは「全く雨を」降らさない。あるいは不自然に降らす。風は適当に吹かず、地は損なわれ、水は干上がる。諸々の薬草は本性を捨てて不自然になる。それ故居住地域は、触れられるものや食べられるものの欠点から破滅する。

CSC.3.3.19-20 kuto mūlaṃ kiṃmūlaṃ ity arthaḥ / tasya mūlaṃ adharma ity aihikam adharmaṃ darśayati / tat-mūlaṃ veti tasya vāta-ādi-vaiguṇyasya mūlaṃ pūrva-kṛtaṃ vā karma / tenaiḥiko vādharmo janmāntara-kṛto vādharmo vāta-ādi-vaiguṇyasya kāraṇam iti brūte / tad yadā deśety ādinā tv aihikam eva adharmaṃ yad vakṣyati hetutayā tat pratyakṣatvena sphuṭa-siddhānta-arthaṃ, na tu janmāntara-kṛta-adharmaṃ masya akāraṇatveneti jñeyam / tayor iti aihika-janmāntariyayor adharmayoḥ / yonir iti kāraṇam / sprśya-abhyavahārya-doṣāt iti sprśyasya vā jala-āder abhyavahāryasya ca kṛtsnasya duṣṭatvāt / etac ca prādhānyena jñeyam; tena duṣṭa-pavana-gandha-doṣo 'pi jñeyah, asāmya-gandho 'pi duṣṭa-vāte uktah //19//20//

CSCI.3.3.19-20 「どのような原因をもって」とは、いかなる原因をもってという意味である。

「その原因はアダルマである」とは、現世でのアダルマを説明している。「または…その原因である(tanmūlaṃ vā)」とは、その風等の欠陥の原因は、あるいは以前に為されたカルマであるということである。従って、現世でのアダルマかあるいは以前の生存で為されたアダルマが、風等の欠陥の原因であると言っている。一方「例えば、地方…」によって、以下では原因として述べるであろう他ならぬ現世でのアダルマは、現に知覚されるものであるということから「立論者の」明らかな主張のためにあるのであって、以前の生存で為されたアダルマが原因ではないということからではないと知られるべきである。「それら両方」とは、現世と以前の生存と「の両方」で為されたアダルマということである。「源」とは原因のことである。「触れられるものや食べられるものの欠点から」とは、水等の触れられるものや食べられるもののすべてが損なわれているからということである。またこれは、主要なこととして知られるべきである。従って、損なわれた風の香の欠点もまた知られるべきである。〔第7節において〕損なわれた風に関する不適当な香も言われている。//19//20//

CS.3.3.21 tathā śāstra-prabhavasyāpi janapada-uddhvaṃsasyādharma eva hetur bhavati / ye 'ti-pravṛddha-lobha-kroda-moha-mānās te dur-balān avamatyātma-svajana-para-upaghātāya śastreṇa parasparam abhikrāṃanti, parān vābhikrāṃanti, parair vābhikrāmyante //21//

同様に、武器から生ずる居住地域の破滅も、原因はアダルマに他ならない。過剰に増大した欲・怒り・迷い・うぬぼれを持つ者たちは力の弱い者たちを蔑視して、自分・親族・敵を攻撃するための武器によって、〔ある者たちは〕互いに傷つけ、あるいは〔ある者たちは〕敵を傷つけ、あるいは〔ある者たちは〕敵によって傷つけられる。

CSC.3.3.21 śastra-prabhavasyāpī bahuja-
māṛakasya śastra-prabhavasyety arthaḥ/ ātma-
svajana-para-upaghātāyety atra ātmanah sva-
janasya parasya copaghāto bhavati prāya ity
arthaḥ //21//

CSCI.3.3.21 「武器から生ずる…も
(śastraprabhavyāpi)」とは、多くの人々を死に至
らしめる武器から生ずることという意味である。
「自分・親族・敵を攻撃するための」とは、こ
こでは自分と親族と敵との「間の」攻撃が主で
あるという意味である。//21//

CS.3.3.22 rakṣogaṇa-ādibhir vā vividhair bhūta-
saṅghais tam adharmam anyad vāpy apacāra-
antaram upalabhyābbihanyante //22//

あるいはラクシャス等の種々の魔物の群れに、
アダルマまたは異なる別の過失を知られて、苦
しめられる。

CSC.3.3.22 rākṣasa-ādi-utsādo 'pi janānām
adharmā-kṛta eva bhavaty āha --- rakṣogaṇety-
ādi/ anyad vā apacāra-antaram iti yathā-ukta-
adharmā-kāraṇāt anyad adharmā-kāraṇam aśau-
ca-ādity arthaḥ //22//

CSCI.3.3.22 ラクシャス等による破壊も、人々
のアダルマによって作り出されたことに他なら
ないと言って、「ラクシャス(rakṣogaṇa)…」とあ
る。「または異なる別の過失」とは、前に述べ
られたアダルマという原因とは異なるアダルマ
という原因である汚れ等という意味である。
//22//

CS.3.3.23 tathābhiśāpa-prabhavasyāpi adharmā
eva hetur bhavati / ye lupta-dharmāṇo dharmāt
apetās te guru-vṛddha-siddha-ṛṣi-pūjyān ava-
matyāhitāny āca-ranti; tatas tāḥ prajā guru-
ādibhir abhiśaptā bhasmatām upayānti prāg
evāneka-puruṣa-kula-vināśāya, niyata-pratyaya-

upalambhād aniyatās cāpare //23//

同様に、呪いから生ずることも、原因はアダル
マに他ならない。ダルマを失った者たち、ダル
マを欠く者たちは、グル・長老・シッダ・リシ・
敬われるべき者たちを蔑ろにして、諸々の不適
当なことを行う。それ故それらの人々は、多く
の人々からなる一族の滅亡を望むグル等に呪わ
れて、直ちに灰になる[すなわち、死ぬ] (注15)。
定められた契機が認められるから、離れてい
た (注16) 他の者たちも[灰になる]。

CSC.3.3.23 prāg eveti jhaṭ iti, aneka-puruṣa-
kula-vināśāyābhiśaptā bhasmatām yāntīty
arthaḥ / niyata-pratyaya-upalambhād aniyatās
cāpare bhasmatām yāntīti yojanā / aniyatā
amilitā ity arthaḥ/ pratiniyata-puruṣa-abhiśāpāt
pratiniyatā eva bhasmatām yānti, na sarve janā
ity arthaḥ //23//

CSCI.3.3.23 「直ちに」とは、すぐにというこ
とである。「多くの人々からなる一族の滅亡を
望む[者たちに]」「呪われて」「灰に」なる
という意味である。「定められた契機が認めら
れるから、離れていた他の者たちも」灰になる
という構造上の理解がある。「離れていた」と
は共にいなかったという意味である。それぞれ
特定の人に向けられた呪いから、それぞれ特定
の者たちこそが灰になるのであって、全ての人々
が[灰になるの]ではないという意味である。
//23//

CS.3.3.24 prāg api cādharmaḥ rite nāsubha-
utpattir anyato 'bhūt/ ādikāle hy aditi-suta-sama-
ojaso 'tivimala-vipula-prabhāvāḥ pratyakṣa-
deva-devarṣi-dharma-yajña-vidhi-vidhānāḥ
śaila-sāra-samhata-sthira-śarīrāḥ prasanna-
varṇa-indriyāḥ pavana-sama-bala-java-parā-
kramās cāru-sphico 'bhirūpa-pramāṇa-ākṛti-
prasāda-upacayavantāḥ satya-ārjava-ānṛśaṃ-
sya-dāna-damani-yama-tapa-upavāsa-brahma-
carya-vrata-parā vyapagata-bhaya-rāga-dveṣa-

moha-lobha-krodha-śoka-māna-roga-nidrā-tandrā-śrama-klama-ālasya-parigrahāś ca puruṣā babbhūvur amitāyusaḥ/ teṣāṃ udāra-sattva-guṇa-karmaṇām acintya-rasa-vīrya-vipāka-prabhāva-guṇa-samuditāni prādur babbhūbuh śasyāni sarva-guṇa-samuditatvāt pṛthivī-ādīnām kṛtayugasya ādau / bhraśyati tu kṛtayuge keśāṃcid atiādānāt sāmpannikānām sattvānām śarīra-gauravam āsīt, śarīra-gauravād śramah, śramād ālasyam, ālasyaṃ saṃcayah, saṃcayāt parigrahaḥ, parigrahād lobhaḥ prādur āsīt kṛte/ tatas tretāyām lobhād abhidrohaḥ, abhidrohād anṛta-vacanam, anṛta-vacanāt k āma-krodha-māna-dveṣa-pāruṣya-abhigāta-bhaya-tāpa-śoka-cintā-udvega-ādayaḥ pravṛttāḥ / tatas tretāyām dharma-pādo 'ntardhānam agamat/ tasyāntardhānāt yuga-varṣa-pramāṇasya pāda-hrāsaḥ, pṛthivī-ādeś ca guṇa-pāda-praṇāśo 'bhūt/ tat-praṇāśa-kṛtāś ca śasyānām sneha-vaimalya-rasa-vīrya-vipāka-prabhāva-guṇa-pāda-bhram-śah/ tatas tāni prajā-śarīrāṇi hīyamāna-guṇa-pādair āhāra-vihārair ayathā-pūrvam upaśta-bhya-mānāny agni-māruta-paritāni prāg vyādhibhir jvara-ādibhir ākrāntāni/ ataḥ prānino hrāsam avāpur āyusaḥ kramaśa iti //24//

以前にも、アダルマなくして他から不浄が生ずることはなかった。実に太初において、人々はアディティの子たちと同等の威力を持ち、極めて純粋で強大な力を持ち、デーヴァ・デーヴァリシ・ダルマ・ヤジュニヤ・ヴィディ・ヴィダーナ^(注17)を直接知覚し、岩のように硬く凝集して固まった身体を持ち、清浄な顔色と感覚機能を持ち、風神に等しい力・速さ・武勇を持ち、美しい尻を持ち、すばらしい大きさ・形相・恩寵・肉付きを持ち、真実・誠実・慈悲・贈物・自己制御・禁戒・苦行・断食・禁欲・警戒に専心し、恐れ・執着・憎悪・迷い・欲・怒り・悲しみ・うぬぼれ・病氣・睡眠・倦怠感・疲労・退屈・怠惰・所有を離れ、そして無限の「ように長い」^(注18)寿命を持つ者たちであった。クリタユガ^(注19)のはじめには地等が全ての属性をそなえていたから、優れた精神・属性・カルマを

持つ^(注20)彼らに諸作物は想像を超えるラサ・ヴィールヤ・ヴィパーカ・プラバーヴァという属性をそなえて現れた。しかしクリタユガが衰退しつつある時、過剰な摂取から^(注21)、「優れた」精神をそなえた者たちの^(注22)身体が重くなった。身体が重いことから疲労が、疲労から怠惰が、怠惰から蓄積が、蓄積から所有が、所有から欲がクリタユガにおいて現れた。そしてそれから、トレーターユガにおいて欲から悪意が、悪意から虚語が、虚語から愛・怒り・うぬぼれ・憎悪・暴力・傷つけること・恐れ・苦痛・悲しみ・物思い・動揺などが起こった。そして、トレーターユガにおいてダルマの4分の1が消失した。その消失から、ユガの年の長さが4分の1減少し、また地等の属性の4分の1が消滅した。また、それ（地等の属性）の消滅によって作り出されたのが、諸作物のなめらかで純粋なラサ・ヴィールヤ・ヴィパーカ・プラバーヴァという属性の4分の1の喪失である。それ故「トレーターユガにおける」人間の身体は、以前とは異なり、属性の4分の1が失われている食物と運動とによって支えられていて、すぐにピッタとヴァータで満たされて発熱等の病気に侵される。このことから、生き物は徐々に寿命の減少を得た、と「アートレーヤは言った」。

CSC.3.3.24 ādi-āvirbhāve ca rogānām adharma eva kāraṇam ity āha --- prāg api cety ādi/ yajñāḥ yajña-devatā, vidhiḥ yajña-vidhāyako vedaḥ, vidhānam yajña-karma/ javaḥ vegah/ parigrahaḥ mamatā/ amitam ivāti-bahutvenāyur yeṣāṃ te amitāyusaḥ/ satye hi catur-varṣa-śataṃ āyuh, yad uktam bhagavatā vyāseṇa --- "puruṣaḥ sarva-siddhārthaś catur-varṣa-śata-āyusaḥ/ kṛte" iti/ sāmpannikānām īśvarānām/ kṛte iti kṛtayugasya śeṣe/ hīyamāna-guṇa-pādair iti yathā yathā tretāyāḥ kṣayo bhavati, tathā tathā āhāra-vihāra-guṇa-pāda-hrāso bhavan nāste iti darśayati/ vihāro 'pi cādharmavatām hīna-guṇo bhavati, tena na yathāvad śarīra-upaśtambhanam karoti/

upaṣṭabhyamānānī dhātu-sāmyena pāyamānāni //24//

CSCI.3.3.24 諸病の最初の出現に関しても、アダルマこそが原因であると言って「以前にも (prāg api ca) …」とある。ヤジュナとは供儀の神格であり、ヴィディとは供儀を規定するヴェーダであり、ヴィダーナとは供儀における祭式行為である。「速さ」とは流れである。「所有」とは所有者たる意識である。寿命が無限のように非常に長い者たちが「無限の寿命を持つ者たち」である。実に、クリタユガにおいて寿命は400年である。偉大なヴィヤーサによって次のように言われている。「人々は、あらゆる目的を成就し、400年の寿命を持つ。クリタユガにおいて。」と。「そなた者たち(sāṃpannikānām)」とは、支配者(śvarāṇām)である。「クリタユガにおいて」とは、クリタユガの「はじめではない」他の時にということである。「属性の4分の1が失われている」とは、トレーターユガが尽きるのに従って「次第に」食物と運動との属性の4分の1が減少するのではないということの説明している。また、運動でも、アダルマを持つ者たちのものは属性が不足している。従って、適切に身体を支えられない。「支えられていて」とは、ダートゥ^(注23)の均衡による維持がなされているということである。//24//

CS.3.3.25 bhavataś cātra ---

yuge yuge dharma-pādaḥ krameṇānena hiyate/
guṇa-pādaś ca bhūtānām evaṃ lokāḥ praliyate //25//

またここに「詩節が」2つある。ユガ毎にダルマの4分の1が次第に失われる。諸要素の属性の4分の1も「失われる」。このように世界は帰滅する。

CS.3.3.26 saṃvatsara-śate pūrṇe yāti saṃvatsaraḥ kṣayam / dehinām āyusaḥ kāle yatra yat-

mānam iṣyate //26//

そこ(各ユガ)でその「時間の」長さに認められている、身体を持つ者たちの寿命の時間については、「ユガの」100「分の1」年が満了するとき、1年が尽きる^(注24)。

CS.3.3.27 iti vikārāṇām prāgutpatti-hetur ukto bhavati //27//

と、諸病が最初に生じた原因が言われているのである。

CSC.3.3.25-27 saṃvatsara-śate pūrṇa iti saṃvatsaraṇa śatatame 'mśe pūrṇe/ yatra yat-mānam iṣyate iti yatra yuge yat-mānam iṣyate, tasya śatatame 'mśe pūrṇe varṣa ekah kṣayam y āi/tena, kalau śata-varṣa-āyusi yadā śatatamo 'mśo yāti kṣayam tadā navaṇavatiḥ parama-āyur bhavati ādy anusaraṇīyam //25-27//

CSCI.3.3.25-27 「100年が満了する」とは、1年(saṃvatsara)で「ユガの」100分の1が満了するということである。「そこでその長さに認められている」とは、そのユガにおいてその長さに認められているということで、それ(ユガ)の100分の1が満了するとき、「寿命の」1年が尽きる。従って、100年が寿命であるカリユガにおいて「ユガの」100分の1が尽きたときには、99「歳」が最高齢である等々と同様に続けられるべきである。//25-27//

CS.3.3.28 evaṃ vādinam bhagavantam agniveśa uvāca --- kinnu khalu bhagavan! niyata-kāla-pramāṇam āyuh sarvaṃ na veti //28//

このように言う尊い人(アートレーヤ)にアグニヴェーシャは言った。さて、尊い人よ!あらゆるものの寿命は、時間の長さが定められているのか、いないのか、と^(注25)。

CS.3.3.29 taṃ bhagavān uvāca ---

iḥāgniveśa! bhūtānām āyur yuktim apekṣate/
daive puruṣakāle ca sthitam hy asya bala-

abalam//29//

尊い人は彼に言った。アグニヴェーシャよ！
ここ（この論書）では、諸生物の寿命は結合
（yukti）^{（注26）}にかかわる。実に、それ（寿命）
の力の強弱は、運命（daiva）と人為（puruṣakāla）
とに基づく。

CS.3.3.30 daivam ātmakṛtaṁ vidyāt karma yat
paurvadaiḥikam / smṛtaḥ puruṣakāras tu kriyate
yad ihāparam //30//

運命とは、前世の身体で為した、自分が作り出
したカルマと知るべきである。一方、別にこの
世で為されるものは、人為と言われる。

CS.3.3.31 bala-abala-viśeṣo 'sti tayor api ca
karmanāḥ / dṛṣṭaṁ hi trividhaṁ karma hīnaṁ
madhyamam uttamaṁ //31//

それら両方のカルマにも、力の強弱の区別が
ある。実に、弱・中・強という3種類のカルマ
が経験される。

CS.3.3.32 tayor udārayor yuktir dīrghasya ca
sukhasya ca / niyatasyāyūṣo hetur viparīṭasya
cetarā //32//

優れた両者（運命と人為）の結合は、長く快
適で〔各ユガに〕^{（注27）}定められている寿命
の原因である。また、その他の〔結合〕は、逆の
〔寿命の原因である〕。

CS.3.3.33 ab madhyamā madhyamasyeṣṭā
kāraṇaṁ śṛṇu cāparam /

中位の〔結合〕は中位の〔寿命の原因である〕
と認められている。別の原因も聞くべきである。

CSC.3.3.28-32 yuktim apekṣata iti daiva-
puruṣakārayor yogam apekṣate niyatatve 'niyata-
tve cety arthaḥ/ balaṁ cābalaṁ ca bala-abalam;
tatrāyūṣo niyatatvena balaṁ, aniyatatvenābalaṁ
jñeyam / yady api paurvadaiḥikam karmā-
sthīratvena gatam, tathāpi tat-janīta-adṛṣṭasya
vidyamānatvāt taddvārā tat-karma kāraṇaṁ

bhavaty eveha janmany api/ puruṣakāras tv iha
janmani kṛtaṁ karma sāmānyenocyate/ tatra
bali-maṅgala-ādi adṛṣṭa-jananatvād vyāpriyate,
tathā bheṣaja-ādi rasa-rudhira-ādi-dvārā //28-
32//

CSCI.3.3.28-32 「結合にかかわる」とは、〔寿
命が〕定められていることと定められていない
ことについて、運命と人為との結合にかかわ
るという意味である。力が強いものと力が弱い
ものが「力の強弱」である。そのうち、寿命
は、定められていることによって力が強く、定め
られていないことによって力が弱いと知られる
べきである。たとえ、前世の身体で為したカル
マが非恒常なものであることによってなくなっ
てしまっても、それから生じた不可見力が存在
していることから、それによるそのカルマは、現
世の生存においても原因であるにちがいない。
一方、人為は現世の生存において為されるカル
マと一般に言われる。そのうち、供物や吉祥な
文句等は、不可見力が生み出されるものである
ことから用いられ、同様に、ラサや血液等^{（注28）}
による薬などが〔用いられる〕^{（注29）}。

^{（注30）}「優れた」とは、推奨されることから
〔第31節に言われている〕強〔力なカルマ〕と
いうことである。「長く」とは、ラサーヤナ等
によって100〔年〕よりも長いということ、「快
適で」とは、病気を免れていることによってと
いうこと、「定められている」とは、ユガにおい
て定められているということで、カリユガにお
いては100年の長さのという意味である。100
〔年〕より短い〔ユガに〕定められていない
〔寿命〕でも、ここでは定められたという言葉
によって言われている。従って、そこ（各ユガ）
ではそれ（寿命）が運命と人為とから生まれる
ということは起こらないが、それにも関わらず、
それ（寿命）が推奨されない運命と人為とから
生まれること故に、運命と人為とから生まれる

ことがある、ということは妥当である。さらに、人々はまさに定められていない寿命を持つ、ラサーヤナに値する者たちである。定められている寿命に対してラサーヤナは意味を為さないから。また、ラサーヤナ等によって作り出される寿命は推奨されることから、推奨される運命と人為とから生まれる定められていない「寿命」である、ということは妥当である。あるいは、「寿命が」長い場合には「定められている寿命の原因がある」という構文上の理解がある。従って、ユガにおいて定められている100年と、それ以上の定められていない「寿命」とが、まさに大きなカルマによって作り出される。一方大きな人為による諸病の阻害から、それ（寿命）が快適であることが作り出される。またラサーヤナによって、老いなどの病気が妨げられる。ラサーヤナによって獲得されたものでも、寿命は強力なカルマによって定められるものに他ならないということである。「逆の」「寿命」は、長いことによって定められていない、病気と結びついていることによって不快な「寿命である」。「その他の」とは、「第31節に言われている力が」弱い運命と人為との結合という意味である。「中位の「結合」は中位の」、つまり長いことと長くないこととによって定められていなくて快と不快とであることによって定められていない寿命にとって、中位のカルマ（運命と人為）の結合が「原因である」という意味である。「原因(kāraṇam)」とは、運命と人為との相互の対立に関して起こることという意味である。//28-32//

CS.3.3.33cd daivam puruṣakāreṇa durbalam hy upahanyate //33//

実に、力の弱い運命は人為によって阻害される。

CS.3.3.34 daivena cetarat karma viśiṣṭena upahanyate / dṛṣṭvā yad eke manyante niyatam mānam āyusaḥ //34//

その他のカルマはより優れた運命によって阻害される。これを経験して、ある者たちは寿命の長さは定められていると考える。

CS.3.3.35 karma kiṃcit kvacit kāle vipāke niyatam mahat / kiṃcit tv akāla-niyatam pratyayaiḥ pratibodhyate //35//

あるカルマは大きくて^(註31)、時が熟すことが定められている。しかし、あるものは時間が定められていなくて、諸々の契機によって促される。

CSC.3.3.33-35 udāryor iti praśastatvenottmayoḥ / dīrghasyeti rasāyana-ādinā śatād api dīrghasya; sukhasyeti nīrogatvena; niyatasyeti yuga-niyatasya, kalau varṣa-śata-pramāṇasyety arthaḥ; śatād arvān aniyatam apīha niyata-śabdenocyate; tena na tatra tasya daiva-puruṣakāra-janyatvam ghatate, tathāpi tasyā-praśasta-daiva-puruṣakāra-janyatvāt daiva-puruṣakāra-janyatvam bhavatīti yuktam; kiñ cāniyata-āyusa eva puruṣa rasāyana-adhikāriṇo bhavanti, niyata-āyusaṃ prati rasāyanasyā-kiñcītkaratvāt; rasāyana-ādi-kṛtaṃ cāyur aniyatam praśastatvena praśasta-daiva-puruṣakāra-janyam bhavatīti yuktam/ kiṃvā, dīrghatve sati niyatasyāyuso hetur iti yojanā; tena yuga-niyatam ca śata-varṣam, tathā tat-adhikam cāniyatam mahatā karmaṇaiva kriyate; puruṣakāreṇa tu mahatāsyā sukhitvam rogān upaghātāt kriyate; rasāyanena ca jara-ādi-vyādhi-prati-ghātaḥ kriyate; rasāyana-labhyam apy āyur balavat-karma-niyatam eveti bhāvaḥ/ viparīta-sya dīrghatvenāniyatasya tathā roga-yuktatvena asukhasya/ itareti hīnayoḥ daiva-puruṣakārayor yuktir ity arthaḥ/ madhyamā madhyamasya dīrghatvenādīrghatvenāniyata-sya, tathā sukha-asukhatvenāniyatasyāyuso madhyamayor karmanor yuktir ity arthaḥ/ kāraṇam iti daiva-puruṣakārayor paraspara-bādhane upapattim ity arthaḥ/ daivam ityādi/ durbalam āyur-janam daivam balavatā mārakeṇa dṛṣṭa-apathya-

bhojana-ādinā viparīta-marāṇa-kārya-janānād upahanyate; viśiṣṭena balavatā, itarat karma dṛṣṭam puruṣakāra-ākhyam, upahanyate parābhūyate / etad-daiva-kartṛka-dṛṣṭa-parābhavadarśanād daiva-niyatam eva sarvam āyur iti kecīd manyanta ity āha --- dṛṣṭvetyādi / yadi dṛṣṭam āyuh kārāṇam syāt, na tadā bheṣajaiḥ samyag upapāditānām mṛtyuḥ syāt; yataś ca saty api cikitsite karma-vaśāt tu mṛtyur bhavati; tena, yatrāpi cikitsā jīvayatīti manyante, tatrāpi karmaivāsti jīvana-kārāṇam iti dṛṣṭa-śaktitvād avadhārayāma iti bhāvah/ daiva-puruṣakārayor ubhayor api bādhyatvam darśayann ekāntena niyata-āyuh-pakṣam vyudasyati --- karmety ādi/ na kvacit karma na bhavati; yad ucyate --- "nābhuktaṁ kṣīyate karma kalpa-koti-śatair api/ avāśyam eva bhoktavyam kṛtaṁ karma śubha-śubham" iti/ kiñcit tv akāla-niyatam iti, yathā --- idaṁ mārakaṁ karma na tu kvacit kāle pañcaviṃśa-varṣa-ātau niyatam, tena yasmin kāle puruṣakāra-ākhyam dṛṣṭa-karma-anu-guṇam prāpnoti tasmin kāle saha-kārin-sān-nidhya-upabṛmṣita-balaṁ mārayati, yadā tu dṛṣṭam apathya-sevā-ādi na prāpnoti na tadā mārayati; pratyayaḥ pratibodhyata iti dṛṣṭa-kārāṇair udriktam kriyate/ ye tu bruvate --- kimñcit karma kāla-niyatam yadā pacyate, tasmin kāle pacyate eveti kāla-niyamaḥ; vipāka-niyatam tu --- idaṁ karma vipacyata eva, na tu vipacyata iti na; kāla-vipāka-niyatam tu yathā --- idaṁ karma asminn eva kāle vipacyata eveti; etac ca kāla-vipāka-niyatatvād balavad ucyate; etad eva dṛṣṭa-abādhanīyam iti; teṣāṁ mate, abhuktaṁ api kṣīyate durbala-karma prāyaścitta-ādineti boddhavyam, param viparyaye 'pi tadā kimñcit tv avipāka-kāla-niyatam iti vaktavyam syāt; kimñcit tv akāla-niyatam iti vacanāt tu kāla-niyatam api //33-35//

CSCI.3.3.33-035 「[実に、力の弱い] 運命は (daivam)…」とある。「力の弱い」寿命が生み出される「運命」は、現世で経験される不健康な摂食など死に至らしめる強力な[人為]によって、逆の死という結果が生み出されるから、「阻害される」。「より優れた」つまり強力な[運命]によって、「その他のカルマ」つまり現世で経験される人為と呼ばれる[カルマ]が「阻

害される」つまり征服される。この運命という行為主体による現世での経験の征服という見解から、あらゆるものの寿命は運命によって定められているに違いないと、ある者たちは考えるということを言って、「[これを] 経験して (dṛṣṭvā)…」とある。もし実際に経験される寿命が原因であるならば、諸々の業によって正しく治療された者たちにとって死はないだろうけれども、しかし治療されつつある時でも[前世の]カルマの力故に死がある。従って、治療が生命を保つということを[ある者たちが]考える場合でも、[反論者たちは、前世の]カルマこそが生命の原因である、とこのように、実際に経験されることの有効性に基づいて限定的に考えるということである。運命と人為との両方ともが否定されるということを示しつつ、一方的に寿命とは定められているものだとする主張を棄てて、「[ある]カルマは(karma)…」とある。カルマがないことは決してない。次のように言われている。「享受されていないカルマは、100の優れた治療によっても尽きない。為された浄・不浄のカルマは、必ず享受されるべきである」(注32)と。「しかし、あるものは時間が定められていなくて」とは次のようである。この死に至らしめるカルマは、25年などのどのような時間にも定められていない。だから、現世で経験されたカルマに従って人為と呼ばれるものを得た時に、共働因がそばにいることによって支えられた力を持つものとして、死に至らしめる。しかし、現世で経験される不健康な行い等を得ない時には、死に至らしめない。「諸々の契機によって促される」とは、現世で経験される原因によって顕著なものにされるということである。一方ある者たちは[次のように]言う。あるカルマは熟す時間に定められていて、その時まさに熟すという時間の限定(kālaniyamaḥ)がある。

一方、成熟することに定められている(vi-pākaniyatam)とは、このカルマは成熟するに違はなく、成熟しないということはないということである。また時間と成熟とに定められている(kālavipākaniyatam)とは、このカルマはまさにこの時間に成熟するに違いないということである。またこれは、時間と成熟とに定められていることから、強力なものと言われる。まさにこれが、経験されることによって否定され得ないものということである。それらの考えに関して、力の弱いカルマは享受されていなくても贖罪等によって尽きるということが知られるべきである。別のものは、逆の場合にも、しかしあるものは成熟と時間とに定められていなくて、と言われるべきだろう。しかし、「しかし、あるものは時間が定められていなくて」と言われているから、時間が定められているものでも「大きなカルマだということである」。//33-35//

CS.3.3.36 tasmād ubhaya-dṛṣṭatvād ekānta-grahāṇam asādhu / nidarśanam api cātrōdā-hariṣyāmaḥ --- yadi hi niyata-kāla-pramāṇam āyuh sarvaṃ syāt, tadāyus-kāmaṇaṃ na mantra-ṣadhi-maṇi-maṅgala-bali-upahāra-homa-niyama-prāyaścitta-upavāsa-svastyā-yana-pranipāta-gamana-ādyāḥ kriyā iṣṭayaś ca prayojyeran; nodbhrānta-caṇḍa-capala-go-gaja-uṣṭra-khara-turaga-mahiṣa-ādyāḥ pavana-ādyāś ca duṣṭāḥ parihāryāḥ syuḥ, na prapāta-giri-ṣama-durga-ambu-vegāḥ, tathā na pramatta-unmatta-udbhrānta-caṇḍa-capala-moha-lobha-ākula-matayaḥ, nārayaḥ, na pravṛddho 'gniḥ, ca vividha-ṣa-āśrayāḥ sarīra-uraga-ādayaḥ, na sāhasaṃ, nādeśa-kāla-caryā, na narendraprakopa iti; evamādayo hi bhāvā nābhāva-karāḥ syuḥ, āyusā sarvasya niyata-kāla-pramāṇatvāt/ na cānabhyasta-akāla-maraṇa-bhaya-nivāra-kāṇām akāla-maraṇa-bhayaṃ āgacchet prānīnām, vyarthās cārambha-kathā-prayoga-buddhayaḥ syur maharṣinām rasāyana-adhikāre, nāpindro niyata-āyusāṃ śatruṃ vajreṇābhīhanyāt, nāśvināv ārtam bheṣajenopapādayetām,

na maharṣayo yathā-iṣṭam āyus tapasā prāp-nuyuḥ, na ca vidita-veditavyā maharṣayaḥ sasureśāḥ samyak paśyeyur upadiśeyur ācareyur vā/ api ca sarva-cakṣuṣām etat paraṃ yadaindraṃ cakṣuḥ, idaṃ cāpy asmākam tena pratyakṣaṃ, yathā --- puruṣa-sahasrāṇām utthāya-utthā-yāhavaṃ kurvatām akuruvatām cātulya-āyusṭvaṃ, tathā jāta-mārāṇām apratikārāt pratikārāc ca, aṣa-ṣa-prāśinām cāpy atulya-āyusṭvaṃ eva, na ca tulyo yogakṣema udapāna-ghaṭāṇām citra-ghaṭāṇām cotsīdatām; tasmādd hita-upacāra-mūlaṃ jīvitam, ato viparyayān mṛtyuḥ/ api ca deśa-kāla-āmaguṇa-viparīṇāṃ karmaṇām āhāra-vikārāṇām ca krama-upayogaḥ samyak, tyāgaḥ sarvasya cāiyoga-ayoga-mith-yāyogāṇām, sarva-atiyoga-saṃdhāraṇam, asaṃdhāraṇam udīṇāṇam ca gatimatām, sāha-sānām ca varjanam, ārogya-anuvṛttau hetum upalabhāmahe samyag upadiśāmaḥ samyak paśyāmaś ceti //36//

それ故、両方が経験されることから片方だけの認識はよくない。さらにまた、この点に関して例を挙げよう。実にもし、あらゆるものの寿命は定められた時間の長さを持つならば、寿命を望む者たちのマントラ・薬草・宝石・吉祥な文句・供物・奉納・祭火への献供・生活規定・贖罪・断食・祝福の言葉・頂礼・巡礼等(注33)の行為や諸々の祭式(isti)は、試みられないだろう。興奮した凶暴で気まぐれな牛・象・駱駝・驢馬・馬・水牛等も損なわれた風等も、避けるべきものではないだろう。滝・山・険しく渡り難い水の流れは「避けるべきものではないだろう。また、不注意な・狂気の・興奮した・凶暴な・気まぐれな・迷いと欲とに満ちた考えを持つ者たちは「避けるべきものではないだろう。敵たちは「避けるべきものではないだろう。燃えさかる火も、種々の毒を持ち這い回る大蛇等も「避けるべきものではないだろう。無理をすることは「避けるべきものではないだろう。場所と時とを違えた行いは「避けるべきものではないだろう。王の激怒は「避

けるべきものでは] ないだろう、ということである。なぜなら、あらゆるものの寿命は定められた時間の長さを持っていることから、以上のような諸々の存在は、存在しないことをもたささないだろう。また、生き物たちは、繰り返される[死ぬべき]でない時の死の恐怖を防いでいないにもかかわらず、[死ぬべき]でない時の死の恐怖に陥らないだろう。また、偉大なリシたちのラサーヤナ論における著作活動・話らい・実行・知識も無駄だろう。インドラ神も、定められた寿命を持つ敵をヴェジュラで苦しめないだろう。アシュヴィン双神は病人を薬によって治療しないだろう。偉大なリシたちは苦行によって望み通りの寿命を得ないだろう。知られるべきことを知った偉大なリシたちも、神々の長(インドラ)とともに正しく見たり教えたり[薬を]使用したりしないだろう(注³⁴)。さらにまた、全ての感覚器官のなかでこの最高のものがインドラとしての眼であるならば、それは我々にとっても同じであり、それによって次のようなことを現に知覚する。1000人の人々のうち、起きるたびに戦闘する者たちとしない者たちとは異なる寿命を持つ。また、生まれたばかりの者たちは、治療されないからと治療されるからとで[異なる寿命を持つ]。また、毒でないものを[飲んだ者たち]と毒を飲んだ者たちとは、まさに異なる寿命を持つ。また、釣瓶と彩色した水瓶との使用と保存とは、壊れることに関して同じではない(注³⁵)。それ故、生命は適当な行いを原因とし、これに反することから死がある。さらにまた、場所・時・自己の属性とは逆の行為(karma)と、摂食の変化の順序正しい適用、[対象・行為(karma)・時の](注³⁶)全てとの過剰な結合・結合の欠如・誤った結合の放棄、あらゆる過剰な結合の抑止、高まった排泄の欲求を抑えないこと、そして無理をすること

の回避は、無病の継続における原因であると我々は認めて正しく教え正しく見る、と[アートレーヤは言った]。

CSC.3.3.36 atah param uttaram upasamharati --- tasmād ityādi / ubhaya-dṛṣṭatvad iti daivasya puruṣakāreṇa, tathā puruṣakārasya daivena bādha-darśanāt / ekānta-grahaṇam iti niyatam evāyur iti tathā aniyatam evāyuh sarvam iti cety arthaḥ / nidṛṣṭyate 'bhimataḥ pakṣaḥ sādhyate 'neneti nidarśanam yuktir ity arthaḥ / atreti anaikāntika-pakṣe / yadītyādinā prakaraṇena āyur-janakasya dṛṣṭasya hetoḥ sevā tathā āyur-vighātakasya hetor asevā sarva-prāmāṇika-jana-avivāda-siddhā darśyate / sā ca sarvā yadi niyatam āyuh syāt tadā akimṛcitkarī syāt, aniyate cāyusī kimṛcitkarī syāt; tasmād aniyatam apy āyur bhavati bhāvah / na ca sarvatraivādīṣṭam eva kāraṇam dṛṣṭam akimṛcitkaram eveti vadato dṛṣṭasyāpi trivṛt-āder vireka-ādi-kartṛtvam vyaktam eva; adṛṣṭasyaiva tu kāraṇatvam dṛṣṭekārya-anupapatteḥ kalpanīyam; tena-adṛṣṭasya kāraṇatvam dṛṣṭa-kāraṇa-mūlam ity arthaḥ; na ca dṛṣṭa-kāraṇa-ucchedaḥ kalpayitum api pāryate / iṣṭayaḥ yajñāḥ / atyartha-sarpaṇa-sīrā uragāḥ sarīṣpa-uragāḥ / ācareyur vā "bheṣajam" iti śeṣaḥ / cakṣuṣāṃ param iti atyartha-abhrāntatvena / atulya-āyusṭvam iti ye āhavam kurvate te śastreṇa mriyante, ye tu na śastreṇa na prāyo mriyante / pratīkārād apratīkārāc cātulya-āyusṭvam iti yojanā / na ca tulyā ity ādau citra-ghaṭo yaś citrita iva sthāpyate, sa hi pāṇīya-vahana-ādi-pratyavāya-hetu-abhāvāc ciraṃ tiṣṭhati; udapāna-ghaṭas tu jala-sambandhāt tathā vahana-samaye patana-ādinā ca śighram utsīdati / hita-upacāra-mūlam iti hita-upacāra-mūlam api / krama-upayogaḥ samyag iti yojanā / sarva-atiyoga-saṃdhāraṇam sarva-atiyogānām varjanam //36//

CSCI.3.3.36 さらに、以下のことが要約されていると言って、「それ故…」とある。「両方が経験されることから」とは、人為による運命の、同様に、運命による人為の否定が見られることからということである。「片方だけの認識」とは、寿命は定められているに違いないという

「片方だけの認識」、また同様に、あらゆるものの寿命は定められていないに違いないという「片方だけの認識」という意味である。これによって望ましい主張が例示されるつまり立証されるというのが、「例」つまり論証という意味である。「この点に関して」とは、両方ともあり得るという主張に関してということである。「[実に]もし…」の文脈によって、現世で経験される寿命を生み出す原因を実行することと寿命を妨げる原因を実行しないことが、あらゆる認識基準に基づく人々に異論なく確定していると説明されている。またそれら全ては、もし寿命が定められているならば意味を為さず、寿命が定められていないならば意味を為すだろう。それ故、定められていない寿命もあるということである。また、常に不可見力こそ原因であって経験は何の役にも立たないとは言っていないから、現に知覚されるものであってもトリヴリト^(注37)等が瀉下等の原因であることは明らかである。一方、不可見力こそ原因であるということは、直接的に目に見える原因があり得ないから想定されるべきことである。従って、不可見力が原因であるということは、現に知覚される原因の原因であるという意味である。そして、経験される原因の断絶は想定され得ない。「諸々の祭式」とは、諸々の供儀である。よく這う大きな蛇が、「這い回る大蛇」である。薬を「使用したり」と補って読まれるべきである。感覚器官のなかで最高のものとは、極めて錯覚がないということによっている。「異なる寿命を持つ」とは、戦闘する者たちは武器によって殺され、他方「戦闘」しない者たちはほとんど武器によって殺されない。治療されるからと治療されないからとで異なる寿命を持つという構文上の理解がある。「また、…同じではない(na ca tulyāḥ)」においては「次のようなことが言わ

れている」。まるで飾られたもののように保たれている彩色した水瓶は、実に飲用水を運ぶなど減損の原因が存在しないから長持ちする。一方、釣瓶は水と結びついているから、また運ぶ時に落とされること等によって、すぐに壊れる。「適当な行いを原因とし」とは、適当な行いも原因としているということである。正しい順序の適用という構文上の理解がある。「あらゆる過剰な結合の抑止」とは、あらゆる過剰な結合の回避ということである。//36//

CS.3.3.37 *ataḥparam agniveśa uvāca --- evaṃ saty aniyata-kāla-pramāṇa-āyusāṃ bhagavan! katham kāla-mṛtyur akāla-mṛtyur vā bhavatīti* //37//

さらにアグニヴェーシャは言った。尊い人（アートレーヤ）よ！そうであるなら、なぜ、定められていない時間の長さの寿命を持つ者たちに「死ぬべき」時の死と「死ぬべき」でない時の死とがあるのか。

CSC.3.3.37 *evaṃ satīyādi / yat tāvat-kāla-niyataṃ tasyākāle maraṇa-abhāvād eva nākāla-mṛtyur asti, yat tv akāla-niyataṃ tasyāpy aniyatatvāt katham kāla-mṛtyur akāla-mṛtyur vā bhavati? aniyate hy āyusī kāla-niyamo nāsti, niyata-kālāc cārvāg akāla-mṛtyur ucyata iti pṛcchā-arthaḥ* //37//

CSCI.3.3.37 「そうであるなら(evaṃ sati)…」とある。ある長さに時間が定められているもの（寿命）に「死ぬべき」でない時に死は存在しないから、「死ぬべき」でない時の死はない。一方、時間が定められていないものでも、それは定められていないのだから、なぜ「死ぬべき」時の死と「死ぬべき」でない時の死とがあるのか？ 実に、寿命が定められていないならば時間の限定はなく、また定められた時間故にそれより早い「死ぬべき」でない時の死が言われる、という質問の意味である。//37//

CS.3.3.38 tam uvāca bhagavān ātreyaḥ --- śrūyatām agniveśa! yathā yāna-samāyukto 'kṣaḥ prakṛty-aivākṣa-guṇair upetaḥ sa ca sarva-guṇa-upapanno vāhyamāno yathākālaṁ svapramāṇa-kṣayād evāvasānaṁ gacchet, tathāyuh śarīra-upagataṁ balavat prakṛtyā yathāvad upacaryamānaṁ svapramāṇakṣayād evāvasānaṁ gacchati; sa mṛtyuh kāle/ tathā ca sa evākṣo 'tibhāra-adhiṣṭitavād viṣama-pathād apathād akṣa-cakra-bhaṅgād vāhya-vāhaka-doṣād aṇi-mokṣād anupāṅgāt paryasanāc cānta-ravasānaṁ āpadyate, tathāyur apy ayathā-balam ārambhād ayathā-agni-abhyavaharaṇād viṣama-abhyavaharaṇād viṣama-śarīra-nyāsād atimaithunād asat-saṁśrayād udīma-vega-vinigrahād vidhārya-vega-avidhāraṇād bhūta-viṣa-vāyu-agni-upatāpād abhigāhāt āhāra-pratikāra-vivarjanāc cāntarāvasānaṁ āpadyate, sa mṛtyur akāle; tathā jvara-ādīn apy ātānkān mithyā-upacaritān akāla-mṛtyūn paśyāma iti //38//

尊いアートレーヤは彼に言った。聞きなさい、アグニヴェーシャよ！例えば、乗り物に取り付けられた、まさに本来的に諸々の車軸の属性を備え持つ車軸は、全ての属性を持って乗れつつあるなら、適切な時にまさに自身の「寿命の」長さが尽きるが故に終わりに至る。同様に、身体を獲得した本来的に強力な寿命は、適切に扱われつつあるなら、まさに自身の「寿命の」長さが尽きるが故に終わりに至る。それが「死ぬべき」時における死である。また同様に、まさにその車軸は、過剰な重荷を乗せられること故に、でこぼこ道故に、道がない「ところを進む」^(注38)が故に、車輪が壊れるが故に、乗せられたものと牽引するものとの欠点故に、輪止めくさびがはずれるが故に、油を差さないが故に、転覆故に途中で終わりになる。同様に寿命であっても、体力に不適切な活動故に、消化力に不適切な食物の摂取故に、均斉を欠いた食物の摂取故に、均斉を欠いた体勢故に、過剰な性交故に、よくない人々との交際故に、高まった生理的欲求

の抑制故に、抑制されるべき生理的欲求を抑制しないが故に、魔物・毒・風・火によって苦しめられるが故に、負傷故に、食物や治療の回避故に、途中で終わりになる。それが「死ぬべき」でない時における死である。同様に、発熱等の病気であっても、誤った治療は「死ぬべき」でない時の死を「もたらす」^(注39)と我々は見る、と「アートレーヤは言った」。

CSC.3.3.38 yathākālaṁ iti yāvātā kālena pratyavāya-sūnyasyākṣasya kṣayo bhavati tasminn evety arthaḥ / svapramāṇa-kṣayād eveti yugānūrūpa-varṣa-śata-ādi-pramāṇakṣayād ity arthaḥ / apathād iti sarvathā amārga-gamanāt/ aṇi-mokṣād iti kīla-mokṣāt / anupāṅgād iti snehā-ādānāt / paryasanāt parikṣepāt / mithyā-upacaritān iti asamyak-cikitsitān/ akāla-mṛtyūn iti akāla-mṛtyu-karān //38//

CSCI.3.3.38 「適切な時に」とは、破損のない車軸が時間の経過に応じて尽きる、まさにその時にという意味である。「まさに自身の「寿命の」長さが尽きるが故に」とは、ユガに応じた100年等の長さが尽きるが故にという意味である。「道がない」とは、全く道のないところを進むということである。「輪止めくさびがはずれる」とは、留め具がはずれるということである。「油を差さない」とは、油がとれるということである。「転覆」とは、ひっくり返ることである。「誤った治療」とは、正しくない治療ということである。「「死ぬべき」でない時の死」とは、「死ぬべき」でない時の死をもたらすものということである。//38//

CS.3.3.39 athāgniveśaḥ papraccha --- kinnu khalu bhagavan! jvaritebhyah pāṇiyam uṣṇaṁ prayacchanti bhiṣajo bhūyiṣṭhaṁ na tathā śītaṁ, asti ca śīta-sādhya 'pi dhātur jvara-kara iti //39//

ここでアグニヴェーシャが質問した。尊い人（アートレーヤ）よ！一体なぜ医者たちは、熱のある者たちに、冷たい飲用水ではなく主とし

て温かい飲用水を与えるのか。発熱をもたらす
ダートゥ（ピッタ）^{（注40）}は、冷性によって制
されるもの^{（注41）}であるのに。

CSC.3.3.39 samprati mithyā-upacāra-śrutyā
uṣṇa-toyaṃ jvare 'py āgneye mithyā-upacāraḥ
syād ity āśaṅkyāha --- kimnv ityādi / śīta-sādhya
'pi dhātuḥ pittam uṣṇa-rūpaṃ ity arthaḥ / pāṇīyaṃ
yasmāt sarva-jvaritebhyo dīyate, tasmāt pāṇīyaṃ
evātra prcchati //39//

CSCI.3.3.39 ここでは、誤った治療という言葉
によって、火と関連がある発熱の場合でも、温か
い水は誤った治療であろうということを疑って
言って、「一体なぜ(kinnu)…」とある。「ダー
トゥは冷性によって制されるものであるのに」
つまりピッタは温性を本質とするという意味で
ある。飲用水は熱のある全ての者たちに与えら
れるから、まさに飲用水をここで彼は質問して
いる。//39//

CS.3.3.40 tam uvāca bhagavān āreyaḥ ---
jvaritasya kāya-samutthāna-deśa-kālān abhi-
samikṣya pācana-arthaṃ pāṇīyaṃ uṣṇaṃ pra-
yacchanti bhiṣajāḥ / jvaro hy āmāśaya-sam-
utthaḥ, prāyo bheṣajāni cāmāśaya-samutthānāṃ
vikārāṇāṃ pācana-vamana-apatarpaṇa-samar-
thāni bhavanti; pācana-arthaṃ ca pāṇīyaṃ
uṣṇaṃ, tasmād etad jvaritebhyāḥ prayacchanti
bhiṣajo bhūyistham / tad hi teṣāṃ pītaṃ vātaṃ
anulomayati, agniṃ codaryam udīrayati, kṣip-
raṃ jarāṃ gacchati, śleṣmāṇaṃ pariśoṣayati,
svalpam api ca pītaṃ trṣṇā-praśamanāyopakal-
pate; tathā yuktam api caitan nātyartha-utsanna-
pitte jvare sadāha-bhrama-pralāpa-atisāre vā
pradeyam, uṣṇena hi dāha-bhrama-pralāpa-ati-
sārā bhūyo 'bhivardhante, śītena copāśāmyantī
//40//

尊いアートレーヤは彼に言った。医者たちは、
熱のある者の身体・症状・場所・時を考慮して、
消化のために温かい飲用水を与える。なぜなら、
発熱は胃（未消化物の場所）から発生するもの
であり、また胃から発生する諸病の薬は、主に消

化・催吐・アパタルパナ^{（注42）}の能力を持つ
ものであるから。そして、温かい飲用水は消化
のためであり、それ故、医者たちは熱のある者た
ちに主としてこれを与える。実に、[熱のある]
者たちに飲まれたそれ（温かい飲用水）は、
ヴァータを順調にし、腹部の消化力を高めて速
やかに消化に至り、カパを乾燥させる。また、少
量飲まれただけでも渇きの鎮静へと導く。その
ように作用するものであっても、それは、過度に
増加したピッタによる発熱、あるいは燃えるよ
うな熱感^{（注43）}・目まい・うわごと・下痢を
伴う発熱の場合には与えられるべきではない。
なぜなら、温性によって燃えるような熱感・目
まい・うわごと・下痢はさらに増大し、また冷
性によって鎮まるからである、と[アートレー
ヤは言った]。

CSC.3.3.40 utsanna-pitte pravṛddha-pitte//40//

CSCI.3.3.40 「増加したピッタ」とは、増大し
たピッタということである。//40//

CS.3.3.41 bhavati cātra ---

śītenoṣṇa-kṛtān rogān śamayanti bhiṣagvidāḥ /
ye tu śīta-kṛtā rogās teṣāṃ uṣṇaṃ bhiṣagjitam
//41//

またここに[詩節が]ある。賢い医者たちは
温性によって作り出された諸病を冷性によって
鎮める。一方、冷性によって作り出された諸病
の薬は、温性である。

CSC.3.3.41 na kevalaṃ jvare eva śīta-uṣṇa-
samutthatva-bhedena uṣṇa-śīta-upacāraḥ, kiṃ tu
sarvatraiva vyādhāv evam ity āha --- śītenetyādi/
bhiṣajāś ca te jñānavantaś ceti bhiṣagvidāḥ //41//

CSCI.3.3.41 発熱の場合だけ、冷性・温性から
発生することの区別によって温性・冷性で治療
するのではなく、実に、あらゆる病気の場合に同

様であると言って「…冷性によって(śītena)…」とある。医者であり知識を持つ者たちが「賢い医者たち」である。//41//

CS.3.3.42 *evam itareṣām api vyādhīnām nidāna-viparītaṃ bheṣajam bhavati; yathā --- apatarpaṇa-nimittānām vyādhīnām nāntareṇa pūraṇam asti śāntiḥ, tathā pūraṇa-nimittānām vyādhīnām nāntareṇa patarpaṇam* //42//

同様に、他の諸病であっても、薬は病因に対抗するものである。例えば、アパタルパナの症状を持つ病気はプーラナ^(注44)なしには鎮まらない。同様に、プーラナの症状を持つ病気はアパタルパナなしには「鎮まら」ない。

CS.3.3.43 *apatarpaṇam api ca trividham --- laṅghanam, laṅghana-pācanam, doṣa-avasecanam ceti* //43//

アパタルパナにも3種類ある。ランガナ^(注45)、ランガナと消化剤[との併用]^(注46)、ドーシャ^(注47)の放出である。

CS.3.3.44 *tatra laṅghanam alpa-bala-doṣānām, laṅghanena hy agni-māruta-vṛddhyā vāta-ātapa-parītam ivālpam udakam alpo doṣaḥ praśoṣam āpadyate; laṅghana-pācane tu madhya-bala-doṣānām, laṅghana-pācanābhyām hi sūrya-samāpa-mārutābhyām pāṃśu-bhasma-avakiraṇair iva cānatibahu-udakam madhya-balo doṣaḥ praśoṣam āpadyate; bahudoṣānām punar doṣa-avasecanam eva kāryam, na hy abhinne kedāra-setau palvala-āpraseko 'sti, tadvad doṣa-avasecanam* //44//

そのうち、ランガナは、力の少ないドーシャに「対して為される」。実際に、ランガナによるピッタとヴァータとの増大によって、少量のドーシャは乾燥する。まるで風と熱気とに囲まれた少量の水が「乾燥する」ように。一方、ランガナと消化剤と[の併用]は、力が中程度のドーシャに「対して為される」。実際に、ランガナと消化剤と[の併用]によって、力が中程度のドーシャ

は乾燥する。まるで太陽熱と風と、まき散らされた砂塵と灰とによって、それほど多くない水が「乾燥する」ように。また、多量のドーシャに対して為されるのが、ドーシャの放出に他ならない。実際に、貯水池の堤が壊れた場合に沼水は流出する。そのようにドーシャが放出される。

CSC.3.3.42-44 *na kevalam śīta-uṣṇa-samutthayor eva param hetu-viparyayaṇa cikitsā, kintu apatarpaṇa-ādi-je 'pi hetu-viparītenety āha --- evam ityādi/ apatarpaṇa-samtarpaṇābhyām ca sarvaṃ cikitsitam gṛhītaṃ, na hy apatarpaṇa-samtarpaṇābhyām vinā anyad vidhāna-antaram asti cikitsāyāḥ; yena sarva evopakramāḥ samtarpaṇa-apatarpaṇa-bhedā eva / ata eva viśeṣajñāna-artham apatarpaṇa-bhedān āha --- apatarpaṇam ityādi/ laṅghana-pācanam iti vacanena yatra pācanam kriyate tatrāvaśyam stokamātrayā laṅghanam api kriyate iti darśayati, pācana-kāle hi yadi bṛṃhanam kriyate tadā bṛṃhanenāgneḥ pratikūlena pācanam na syād ity arthaḥ / avakiraṇair ivety atra iva śabdo 'natibahu-udakam ivety evamrūpo jñeyāḥ / nyad veti laṅghana-ādi bṛṃhaṇa-ādi ca* //42-44//

CSCI.3.3.42-44 冷性と温性とから発生するものの場合にだけ、原因と逆のものによって治療するのではなく、アパタルパナ等から生じたものの場合にも、原因に対抗するものによって「治療する」と言って「同様に(evam)…」とある。アパタルパナとサントルパナとによってあらゆる治療が得られる。なぜなら、アパタルパナとサントルパナとを除いて他に、治療に別の規則はないから。そのため、まさに全ての治療法は、サントルパナとアパタルパナとの相違を持つものに他ならない。従って、区別立てを知るために、アパタルパナの区別を言って「アパタルパナ(apatarpaṇam)…」とある。「ランガナと消化剤と[の併用]」と言うことによって、消化剤が用いられているときには、必ずしばらくランガナも用いられるということを説明している。実際に、消化剤[の使用]時に、もしプリン

ハナが用いられるならば、消化力に逆らうプリンハナによって消化剤〔の効果〕がなくなるだろうという意味である。「まき散らされた…ように」というここでの「ように」という言葉は、「それほど多くない水が」「〔乾燥する〕ように」というこのような形で理解されるべきものである^(注48)。//42-44//

CS.3.3.45 doṣa-avasecanam anyad vā bheṣajam prāpta-kālam apy āturasya naivaṃvidhasya kuryāt/ tad yathā --- anapavāda-pratikārasya ādhanasyāparicā-rakasya vaidya-māninaś caṇḍasyāsūyakasya tīvra-adharma-ārucer atikṣiṇa-bala-māṃsa-śonitasyāsādhyā-roga-upahatasya mumūrṣu-liṅga-anvitasya ceti / evaṃvidham hy āturam upacaran bhiṣak pāpiyasā 'yaśasā yogam icchatī //45//

ドーシャの放出あるいは他の薬は、適時であっても、次のような種類の病人に為すべきではない。すなわち、非難に反論しない者、貧困者、看護人のいない者、〔自分を〕医者だと思い込んでいる者、凶暴な者、嫉妬深い者、激しくアダルマを好む者、体力・肉・血液が過剰に弱った者、不治の病に侵された者、瀕死の特徴を持つ者^(注49)。実に、このような種類の病人を治療している医者は、罪深い不名誉と結びつく。

CSC.3.3.45 anapavāda-pratikāro v ācya-pratikārah / adhanasyānupakaraṇatvena na cikitsā pāryate kartum ity arthah / vaidyamānī durabhimānād vaidya-upadeśam na karoti/ tīvra-adharma-ruceḥ pratikriyāyām adharmo bhavati, na ca cikitsā sidhyaty adharma-pratibandhā / mumūrṣu-liṅga-anvitasyeti riṣṭa-yuktasya / pāpiyaseti pāpahetunā pāpa-janakena ayaśasā //45//

CSCI.3.3.45 「あるいは他の」とは、ランガナ等とプリンハナ等とのことである。非難に反論しない者は、非難されるべきことに反論する。「貧困者」とは、道具がないことによって治療が為され得ないという意味である。〔自分を〕

医者だと思い込んでいる者は、ひどいうぬぼれ故に、医者が教えるようにしない。激しくアダルマを好む者には治療の時にアダルマがある。そしてアダルマの妨害ゆえに、治療は成功しない。「瀕死の特徴を持つ者」とは、悪い前兆と結びついた者ということである。「罪深い」とは、罪を原因として罪を生み出す不名誉ということである。//45//

CS.3.3.46 bhavati cātra --- tadāve cānubandhe vā yasya syād aśubham phalam / karmaṇas tan na kartavyam etad buddhimatām matam //46//

またここに〔詩節が〕ある。現在あるいは将来に不浄な結果をもたらすであろう治療行為(karma)は、為されるべきではない。これは識者たちの見解である。

CS.3.3.47 (alpa-udaka-drumo yas tu pravāṭah pracura-ātapah / jñeyah sa jāṅgalo deśah svalpa-rogatamo 'pi ca //47//

(一方、水と木とが少なく、風が強く、日射しに満ちた場所は、乾燥地と知られるべきである。さらにまた、病気が最も少ない〔場所と知られるべきである〕。

CSC.3.3.48 pracura-udaka-vṛkṣo yo nivāto durlabha-ātapah / anūpo bahu-doṣaś ca, samah sādharmaṇo matah //48//

水と木とに富む、風のない、日射しが少ない〔場所〕は、沼地であり欠点が多い。〔水・木・風・日射しに関して〕中間の〔場所〕は、中間〔の特徴を持つ〕地と考えられている。^(注50)

CSC.3.3.46-48 anubandhe vety uttarakālam/ kecid alpa-udaka-drumo yas tv ityādi grantham jāṅgala-ādi-deśa-lakṣaṇam atra paṭhanti //46-48//

CSCI.3.3.46-48 「あるいは将来に」とは、以後にということである。ある者たちは、「一方、水

と木が少なく(alpodakadrumo yas tu)…」という乾燥地などの場所の特徴を持つ詩節を、ここで述べる。//46-48//

CS.3.3.49 tatra ślokāḥ ---

pūrvarūpāṇi sāmānyā hetavaḥ sasvalakṣaṇāḥ /
deśa-uddhvaṃsasya bhaisajyam hetūnām
mūlam eva ca // 49//

ここに「要約の」詩節がある。「星宿などが変化するという」前兆と、「病気の」共通の原因、[風・水・場所・時] それ自体の「変化の」特徴を伴うもの、地方の破滅「を引き起こす病気」の薬、原因の原因、

CS.3.3.50 prāk-vikāra-samutpattir āyusā ca
kṣaya-kramāḥ / maraṇam prati bhūtānām kālā-
akāla-viniścayaḥ // 50//

最初の病気の生起と、寿命が尽きる順序、死に対する諸存在物の「死ぬべき」時と「死ぬべき」でない時との決定、

CS.3.3.51 yathā cākāla-maraṇam yathā-yuktaṁ
ca bheṣajam / siddhim yāty auśadham yeṣāṁ
na kuryād yena hetunā //51//

あるいはまた、「死ぬべき」でない時の死と、適切に用いられた薬は成功に至る「ということ」、どのような者たちに治療を為すべきでないかとその原因。

CS.3.3.52 tad ātreya 'gniveśāya nikhilaṁ
sarvaṁ uktavān / deśa-uddhvaṃsa-nimittīye
vimāne muni-sattamaḥ //52//

これら全てを、最高の聖者アートレーヤは、地方の破滅の原因に関する判断法「の章」において、アグニヴェーシャに完全に語った。

CS.3.3 ity agniveśa-kṛte tantre caraka-
pratisamśkrte vimānasthāne janapada-uddh-
vaṃsanīya-vimānam nāma tṛtīyo 'dhyāyāḥ //3//

以上が、アグニヴェーシャによって作られチャ

ラカによって改編された教典の「判断の巻」における、「居住地域の破滅の判断法」という名前の第3章である。

CSC.3.3.49-52 samgrahe pūrva-rūpāṇi
nakṣatra-ādi-vikārāḥ / sasvalakṣaṇāḥ sasva-
vikṛti-lakṣaṇāḥ, tac ca lakṣaṇam tatra vātam
evaṃvidham ityādinā proktaṁ/ yathāyuktaṁ ca
bheṣajam siddhim yāty anenoṣṇa-pāṇiya-dāna-
upapattī sarvaṁ samgrhitam //49-52//

CSCI.3.3.49-52 要約における「前兆」とは、星宿等の変化のことである。「それ自体の特徴を伴うもの」とは、それ自体の変化の特徴を伴うもののことである。またその特徴は、「第7節で」「そのうち次のような種類の風を…」によって言われている。「適切に用いられた薬は成功に至る」というこれによって、温かい飲用水を与える治療と全てが含まれている。//49-52//

CSC.3.03 iti śrī-cakrapāṇidatta-viracitāyām
caraka-tātparya-ṭīkāyām āyurvedadīpikāyām
vimānasthāne janapada-uddhvaṃsanīya-vimā-
nam nāma tṛtīyo 'dhyāyāḥ //3//

CSCI.3.3 以上が、尊いチャクラパーニダッタによって作られた、チャラカに対する注釈アーユルヴェーダディーピカーの「判断の巻」における、「居住地域の破滅の判断法」という名前の第3章である。//3//

注

- 1) S.Dasgupta, *A History of Indian Philosophy*, vol.II, Cambridge 1932, pp.402-411; M.G.Weiss, *Caraka Saṃhitā on the Doctrine of Karma*, in W.D.O'Flaherty ed., *Karma and Rebirth in Classical Indian Traditions*, Delhi, Varanasi, Patna 1983, pp.90-115; S.S. Bahulkar, *Concept of Premature Death in Ayurveda*, 『アーユルヴェーダ研究』第19号(1989) 所収, pp.89-99.
- 2) karm an. カルマという概念の歴史的変遷やCSにおける注目すべき点については、前号(佐賀医科大学一般教育紀要17号[1998],

- pp.51-66:「インド伝統医学における病因としてのカルマ」)に詳述したので参照願いたい。
- 3) 注釈者チャクラパーニダッタによるとCSには「カルマという言葉によって吐剤の使用など〔の治療法〕(vamanādi)と不可見力(adṛṣṭa)と具体的運動(kriyā)とが言明される (karmasābdena vamanādinām tathā 'drṣṭasya tathā kriyāyās cābhidhiyamānatvāt)」(CS.1.1.52)。このうち今問題にしているのは不可見力。
 - 4) janapa doddhvaṃ saniya. 英訳 S-D., S. では 'epidemics'. 第5節などに見るように、この章で扱われているのは一時期に同じ疾患が多発する流行病であるが、「病気がうつる」「人から人へと伝染する」という点に関しては全く問題にされない。
 - 5) ヴァータ・ピッタ・カパの3つ。病素(doṣa)のこと。cf. 矢野道雄編・訳『科学の名著 第Ⅱ期 1 インド医学概論』, 朝日出版社 1988.p.13注32.
 - 6) nakṣatra と graha とに関して, *ibid.*, p.87注8,9. 参照。
 - 7) rasa, vīrya, vipāka, prabhāva. それぞれが理解しにくい概念。インド薬理学におけるこれらの概念の役割に関して, G.J.Meulenbeld, *Reflections on the basic concepts of Indian pharmacology*, in *Studies on Indian Medical History*, ed. by G.J.Meulenbeld and D.Wujastyk, Groningen 1987参照。ここでは、それぞれが taste, potency, post-digestive taste, specific action と訳されている。
 - 8) 注釈によって補う。
 - 9) アーユルヴェーダの「治療」は予防行為も含む。cf. P.ユアール, J.ボッシー, G.マザール共著, 赤松明彦, 高島淳, 荻本芳信共訳『アジアの医学』, せりか書房 1991.p.65.
 - 10) guhyaka. クベラ(財宝の神)に追隨する半神の一。Manu.12.47に gandharva・yakṣa・vibudhānucara・apsaras とともに列挙されている。
 - 11) 「パンチャカルマ(pañcakarma)とはアーユルヴェーダの根本的な『五つの治療法』であり(中略)頭部の浄化(śirovirecana), 吐剤の使用(vamana), 下剤の使用(virecana), 二種類の浣腸剤の使用(basti)。これに瀉血(raktamokṣa)を加える場合もある。」矢野編 *op.cit.*, p.21注5.
 - 12) 健康増進のために為される不老長生法。cf. *ibid.*, p.55 注9.
 - 13) 注釈によって補う。第4節参照。
 - 14) チャクラパーニダッタはマントラなどで守るという例を挙げる。マントラ以外については第36節参照。
 - 15) バラモンの呪いによって、呪われた者が灰と化す(殺される)例や、呪われた王の王国全体が衰微する例は、原実『古代インドの苦行』, 春秋社 1979.pp.231-258. に詳しい。
 - 16) aniyata. 注釈では amilita と言い換えられている。英訳では, S-D. は 'they do not stay together' とし, K-S. は 'undevoted' として呪われた者たちの(生まれることのない)子孫を指すとしている。S.の解釈は明らかでない。
 - 17) チャクラパーニダッタによればヤジュニャとは供儀の神格、ヴィディとは供儀を規定するヴェーダ、ヴィダーナとは供儀における祭式行為。
 - 18) 注釈によって補う。
 - 19) 以下ユガとその衰退とについては、ハインリッヒ・ツィンマー著、宮元啓一訳『インド・アート --- 神話と象徴』, せりか書房 1988.pp.21-25. 参照。
 - 20) CS.1.8.4-6, 1.1.48によれば, sattva は manas と同義で実体(dravya)である。CS.のmanasについて詳細は、アントネッラ・コンバ, 「『チャラカ・サンヒター』『身体論』第一章とヴァイシェシカ哲学」, 矢野編 *op.cit.*, pp.241-263 参照。
 - 21) CS.1.11.37に「ラサの過剰な摂取は過剰な結合である(rasānām atyādanam atiyogah)」とある。過剰な結合は、結合の欠如・誤った結合と並んで「3種の病気の原因」のうちの一つ。
 - 22) sāmpannikānām sattvānām. 英訳はいずれも「裕福な者たち」。注釈者は sāmpannika を īśvara と言い換えている。
 - 23) cf. 注2.
 - 24) 注釈・英訳者の読みに従う。この解釈によると、寿命は徐々に減少する。通常、クリタ→トレーター→ドヴァーパラ→カリというユガの衰退に従って、ユガの長さは4000「年」→3000「年」→2000「年」→1000「年」となり、寿命は400年→300年→200年→100年となる。クリタユガではユガの40「年」につき寿命が1年尽きるので、寿命は、ユガの始まりの400年から徐々に減ってユガの終わりでは300年となる。トレーターでは300年から始まり、徐々に減って200年にまで至る。以下同様にして寿命が徐々に尽きていく。第24節の中で寿命だけが「徐々に(kramaśah)」(他のものは4分の1ずつ)減少するとされていること、同節の注釈で属性の減り方について特に述べられている点から、このような読みを採用する。
 - 25) この節から第38節までは, S.S.Bahulkar, *op.*

- cit., pp. 90-96. にも英訳され, 矢野道雄, 「アーユルヴェーダ研究会第10回研究総会」, 丸山博監修・アーユルヴェーダ研究会編『インド伝統医学入門』所収, 東方出版 1990, pp. 234-237 に和訳されている。
- 26) cf. 矢野編 *op. cit.*, p. 77 注12, p. 81 注19.
- 27) 注釈により補う。
- 28) 7つの体組織構成要素のこと。ラサ・血液・肉・脂肪・骨・髄・精液。摂取されたものは, 体内でラサから順に精液まで変化し, 体外に排泄されると考えられている。
- 29) これらは, 現世のカルマの中でも, 為した直後には結果が現れてこないものについての言及である。
- 30) 以下の部分は, テキストでは第35節の後に置かれているが, 内容は上記詩節の注釈であるため続けて訳出する。
- 31) CS.4.1.117に, 結果が必ず享受されるカルマがmahatと言われている。
- 32) 出典不明の詩節
- 33) これらの項目は, 「神に依存する(daiva vyāpāsraya) 薬」としてCS.1.11.54に挙げられる項目と一致する。
- 34) ここは, インドラから伝えられたアーユルヴェーダを習得した医者たちについての言及であろう。「薬を」は注釈によって補う。
- 35) 頻繁に実用にさらされている釣瓶と, 飾り物のように扱われる彩色した水瓶とでは, 釣瓶の方が早く傷んで壊れてしまうということ。
- 36) cf. CS.1.11.37.
- 37) 下剤として用いられる代表的な薬草。
- 38) 注釈によって補う。
- 39) 注釈によって補う。
- 40) 注釈による。
- 41) より正確には, 冷性を持つ実体(dravya)によって制される。cf. CS.1.1.60.
- 42) apatarpaṇa. 栄養を与えない(療法)。詳しくは第43,44節参照。
- 43) dāha. 矢野編 *op. cit.*, p. 287. による。
- 44) pūraṇa. 注釈ではサントルパナと言い換えられている。アパタルパナの対立概念。サントルパナについてはCS.1.23.参照。
- 45) cf. CS.1.22.
- 46) 注釈によって補う。
- 47) cf. 注2.
- 48) 末尾の一文は第45節に対する注釈であるため, テキストではここに置かれているが, 後で訳出する。
- 49) cf. 矢野編 *op. cit.*, p. 72 注5. 死の前兆について詳しく論ずるCS.5.のうち, 第2章は, 上村勝彦・宮元啓一編『インドの夢・インドの愛』, 春秋社 1994, pp. 373-376 に矢野氏によ

て和訳されている。

- 50) 全編にわたってK-S.の詩節番号は他と著しく異なるが, 第46-48節に関しては, 詩節の順番も47-48-46と異なっている。K-S.は, 第47節のjāṅgalaをクル族の地(kurujāṅgala)と解し, ここで述べられている場所の特徴を丘陵地と平地との異なりとして捉えている。また第48節dについて, S-D.はsamaを, S.はsādhāraṇa を, jāṅgala・anūpaと並ぶ場所の名称として捉えている。

要約

インド・クシャナ朝のカニシカ王と同時代とされるチャラカの医書「チャラカサンヒター」第3巻(Vimānasthāna) 第3章は「居住地域の破滅の診断法(Janapadoddhvaṃsaniya vimāna)」と題された章である。ここに収録される寿命に関する話題は, 当時の生命観を伝えているものとして注目される。またこの章にはカルマの理論に関わる独特の見解も見られて興味をひく。本稿は, そのサンスクリットテキストの本文と, チャクラパーニダッタ(11世紀頃)による注釈との翻訳を試みたものである。